
とある左天の第四波動

飛妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある左天の第四波動

【Nコード】

N50870

【作者名】

飛妖

【あらすじ】

転生者（原作知識なし）がニードレスの第四波動を使い物語に介入していく話。

プロローグ（前書き）

佐天さんじゃなくオリ主でごめん（あ

プロローグ

俺の名字は【左天^{さてん}】

実は一回死んでるんだ。
所謂転生って奴だな

トラックに轢かれて死んで、新たに命を授かって生まれた。

まあ、前世の記憶を引き継いでいたのには驚いたが、でもそれ以上に驚いた事がある。

・俺が転生した世界が【とある魔術の禁書目録】の世界だったんだ・

実際、読んだ事がなくて原作知識とか無いんだがな。

まあ、それでも第二の人生だから頑張るぞ！っと思って生きてたら。

さらに驚く事が。

俺が自分の事を左天と言っている理由だ。

学園都市は超能力がある。
俺も超能力を持っている。

しかも俺は――

【左天】

レベル5 学園都市 第八位

【能力】

一一一第四波動一一一

第一話―禁書目録―

第四波動・・・

あれだな。

ニードレスの左天の能力だな

最初は驚いたよ

俺に能力があるのが分かって、どんな能力か調べたら熱を吸収できる事が判明。

何か微妙だなと思ってたら熱を放出する事も出来る事が判明。

最初は放出したらモワッ！ってなってたんだが

夏に周囲の熱を根こそぎ吸収して限界まで溜めて放出したらかめはめ波みたいな炎が放出できた。

それでこれ、第四波動じゃん。

と思っただけは俺は自分の能力を第四波動と言っている。

それから口コミか何か知らんがいつの間にか俺の能力名が第四波動になった。

何それ？って人がかなり多い。

本当は熱吸収、熱感知、熱放出だしな。

まあ何だ、その放出での威力からレベル5とされ、第八位とかになった。

まあ、最下位だから俺より上位の超能力者さん達に狙われないけどね。

端からみたら多重能力者っぽく見えるみたい。

熱吸収で凍結。

熱で小型台風とかも出せるし。

まあここまで能力を扱えるようになったのは能力が判明してからかなり頑張ったから。

だが第五波動はまだ使えない。

てか第五波動はどんな能力なのかあんまりわからん。

ま、その辺はさて置き、今日も1日頑張るか

まず最初に・・・

「かつみじょうさん！ご飯をたかると言う名目で左天さんがやって来たよ！」

「またですかあ！？

この貧乏学生にご飯をたかる何てお前は鬼か！」

コイツの名前は【上条当麻】

俺の友達だな。

高校の時に知り合ったんだがなかなか面白いんだよなあ。

俺と上条は同じ高校に通っている。

レベル5だからもつと上の高校に入れ的な事を誰かに言われた気がするが高校とか俺の行きたい場所でもいいだろ。

「残念だが左天だ。」

「いや、知ってるよ。

てかお前レベル5だろ!?

俺より金持ってるだろ!」

まあ確かにレベル5は振り込まれる金が半端ない。

「しょうがないな、なら俺が材料を買ってやるからご飯作ってくだ
さい。」

料理出来ないんだ・・・俺・・・

「それはそれで悪いような

いや、何時も飯をたかられてるから別にいいのか?」

「いいんじゃない?

じゃあ行こうぜ。」

・
・
・
・
・
・

•
さて、材料も買ったし上条さん家に行くか。

「何か悪いな。」

「気にするな。」

俺とお前の仲ではないか！」

・・・一応言う。

BLとかないぞ？

「よし、これのお礼として上条さんが美味しいものを作ってあげましょう。」

「でも普通にファミレスとかの方が美味しい件について。」

「やかましい！ 当たり前だろ！」

と、何だかんだ喋りながら家についた。

「まあ、適当に座っててくれよ。」

と言われ。

テレビでも見ながら待つことにした。

だがふと、気づいた事があり、ベランダを覗く。

「・・・なあ、当麻さんや」

「ん？ 何だ？」

「お前さん、美少女シスターの人形を持っていたりする？」

「はあ？ 何だそりゃ？」

青髪ピアスじゃあるまいし、そんな趣味ないぜ」

確かに、ここが青髪の部屋ならば別に違和感なかったかもしれん。

「ならさあ、この物凄く人形に見えないシスターさんは何？」

人間・・・か？

何で干されてるんだ？

「何言ってn・・・」

ちよいと間が開き・・・

ええええええええええ！？

と言う絶叫が響き渡った。

・
・
・
・
・
・
・

「はむはむ！」

まあ何だ、謎のシスターさんに「お腹減ってるんだよおお!!」と怒鳴られた為に急遽もう一人分を作った上条さん。」

「声に出てるぞ」

「私、怒鳴ってないもん。

変な事言わないで欲しいんだよ!」

「いやまあ、それはいいとしてさあ

何でお前は自分の分を食べた後に上条の分の飯を食ってる?」

この小さな体のどこにこんなに食べ物が入るんだ?

人型のカービーかしら?

嫌いじゃないわ!

「だってお腹減ってるんだもん」

「くっ! こんな小さな子が行き倒れになるなんて世も末だな! いいよ、お兄さんの分も食べなさい!」

「本当! ありがとう!」

「とりあえず言っただいよな?

不幸だ・・・」

まあうん、食材とかなら俺がまた買ってやるから。

・ ・ ・ ・ ・

「でさ、何でウチのベランダに干されてたの？」

「落ちたんだよ。」

本当は屋上から屋上に飛び移るつもりだったんだけど。」

何と・・・

屋上から屋上だと・・・

何て脚力なんだ！

「へ？　ここ8階建てだぜ？」

「仕方がなかったんだよ。」

追われてたからね。」

追われてた・・・

想像以上に特殊な事情をお持ちなようだが、このお嬢さん。

「あ、そうだ！　自己紹介しなきゃね！

インデックス

私の名前は【禁書目録】って言うんだよ」

・・・目次？

凄い名前だな

偽名か？

まあ俺も左天って言う偽名だがな

「インデックス？ってどう聞いても偽名じゃねえか！
何だインデックスって目次か」

「ああ、禁書目録って事なんだけど・・・

あ、魔法名なら【Ded icat us545】」

で、デ？

何ぞ魔法名って。

「ああ？

で、そのインデックスさんが何で追われてんだ？」

「私の持つてる10万3000冊の魔導書が狙いだと思う。」

「へ？ 魔導書？」

ギラとかバギとか、それはメラゾーマではない、メラだ。とか書いてんのかな？

「うん。

エイボンの書、レメゲトン、死者の書。

代表的なのはこういうのだけど」

RPGとかで代表的なネクロノミコンとかもあるのかね？

「中身はともかく、お前、手ぶらにしか見えないんだけど」

「あれか、四次元ポケットか、もしくは口の中に入ってるのか？」

「四次元ポケットとか、よくわからないけど、ちゃんと持ってるよ、10万3000冊！」

「10万3000冊って、どこかの倉庫の鍵でも持ってるのか？」

本が10万って単位で置いてある倉庫ってあるのか？

あるところにはあるのか？

「ううん」

「まさか、馬鹿には見えない本とか言うんじゃないだろうな？」

「そうだとしたら上条さんは絶対に見れないな」
「うるせえ！」

「馬鹿じゃなくても見れないよ
勝手に見られると意味がないもの。」

ふむふむ、ふう。

しかし、暑いな。

ちよっと周囲の気温を下げてやるか。

「……で？」

誰に狙われてるわけ？」

「魔術結社だよ。」

「はぁ？魔術？」

「イー！とか言う奴らでもいんの？」

あ、あれは秘密結社か。

「あれ？ 日本語がおかしかった？
マジックだよ、マジックキャバル。」

「それって、信仰宗教か何かか？」

「残念。俺はキリストセカンド派だから」

まあ、いないけどね。

「そこはかと無く馬鹿にしてるね？」

何故バレたし。

「あゝ」

「そこはかと無く馬鹿にしてるね！」

大事な事なので（ry

「ごめん、無理だ。」

「え？」

「俺も色々、異能の力は知ってるけど、魔術は無理だ。
この学園都市じゃ超能力何て、珍しくも何ともねえからなあ
科学の力で誰だって開発出来ちまう。」

「超能力は信じるのに魔術は信じないって変な話！」

まあ俺達の持つ能力も魔術でいいんじゃない？って能力が結構あるが
な。

「じゃあ、魔術って何だよ。
何なら一丁見せてみろよ。」

「私には魔力がないから使えないもん。」

「使えないんじゃない、魔術があるかどうか分かんないだろうが！」
あるもん！っとインデックス。

魔術ねえ、俺はあると信じたい。
てか超能力があるなら魔術があってもおかしくないんじゃない？

んで、只今、上条さんが自分の右手の話をしている。

「この右手触ると、異能の力なら電撃だろうが超電磁砲だろうが多
分、神の奇跡だって打ち消せますし、はい。」

いやあ、俺も第四波動を打ち消された時はびびったな
まあ、誤射なうえに威力もなかったが。

「・・・・・・・・・・プー！」

インデックスが噴いた。

「何だその怪しい通販見てるみたいな反応は！」

「だってえ、神様を信じてもないなさそうな人に神様の奇跡だって打ち消せますとか言われても」

「ぐう、ムカつく！」

こんなインチキ魔法少女に小馬鹿にされるとは・・・！」

魔法シスター マジカル インデックスってか？

てか何でコイツらは喧嘩しはじめてるんだ。

「これ！ この服！」

これは歩く教会って言う極上の防御結界なんだから！」

何か上条が右手で打ち抜く物を決めてるみたいだが

何で俺に言わないんだろうな。

まあ面白そうだから何も言わんがな。

「何だそれ？ さっきから分けのわからない専門用語ばかりぶち込みやがって、意味わかんねえよ」

その言葉にインデックスがキイイイイ！と唸って台所から包丁持ってきた。

「なら論より証拠！ この包丁で私のお腹を差してみる！」

インデックスが言うにはあの服は服の形をした教会らしい。

服の形をした教会で・・・
凄まじいな。

「あゝ、じゃあ、俺が能力使ってそれに攻撃してみるわ。」

「なっ、包丁より危ないだろ！」

「大丈夫、威力は抑えるし。」

「よし、いいよ、やってみて！」

インデックスが準備万端なのでちよいとやってみるか。

「よし、さっき吸った熱エネルギーを出してみるか。」

歩く協会に狙いをつけて。

「『第四波動（最弱）』」

ドシュッ！ バキン！

あ、弾かれた。

「ほらね！」

どうだつと胸を張るインデックス。

「ふーん、なるほど、確かに凄い事は分かった。
なら俺の右手で触れたらそれは木っ端微塵って訳だな」

「ふふん、君の力が本当ならね！」

「この！ 上等だコラア！」

そこまで言うんならやってやろうじゃねえか！」

上条さんが触る！

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・あれ？」

しかし何も起こらなかった！

「ふふん！ 別に何ともないんだけど？」

そして胸を張った瞬間。

ズバァン！と服が弾け飛んだ。

「な・・・・・・・・」

「？ 何？・・・っ!？」

一瞬の沈黙

「おお、真っ裸になったな・・・」

と言う俺の言葉でインデックスが茹で蛸のように真っ赤になり悲鳴が響き渡った。

主人公紹介 10／27 微妙に追加

【左天】

主人公。

転生者

ちなみに偽名。

第四波動が使えるということから自分で左天と言い始め、今や本名を知る人は数人

かなり左天を意識してたりする。

それにより両腕に何時も包帯を巻いている。

髪の色は灰色

目は白目ではない。

左天のように筋肉ムキムキではない、所謂細マッチョ。

人の呼び方を一つに絞らない。

例えば上条ならば

上条、上条さん、カミヤん、当麻、当麻さんと数種類の呼び方をする。

御坂であれば

御坂、美琴、ピカチュウ、ビリビリ、超電磁砲、電撃少女

上条とは基本的一緒にいたりする。

そのせいで一部から良くない噂が出てたりする。

フルパワー第四波動の温度は1400万度あたり。

二重第四波動もやろうとしたら出来る。

第四波動だけでは心もとないので体術も覚えている。

第五波動は使えるのか分からない。

第四波動は何故か演算を必要としない。

第二話ーインデックスー（前書き）

今思ったけど

超電磁砲はレールガン

一方通行はアクセラレータ

みたいに呼ばれるけど

第四波動のケースは何て呼ばれるんだ？

まあ第四波動は第四波動だから別に第四波動でもいいんだがな。

第二話ーインデックスー

「さて、まあ何だ

シスターのかみくたく！を受けた訳だが・・・」

「たく、あちこち噛みつきやがって・・・」

「何で俺まで噛まれた？」

超イテエ・・・

歯形半端ねえ・・・

「そりゃあ、携帯をカメラモードにすりゃあ噛まれるだろ・・・」

「青髪あたりが発狂しそうな物が撮れそうだったんだがな・・・」

それにしても毛布にくるまっているインデックスの負のオーラっぷりがパネエ

「・・・さっきのは俺が悪かったよ、だから・・・ぬおっ!？」

インデックスが投げつけた時計がダイレクトヒット。

「あれだけの事があったって言うのにどうして普通に話しかけられるんだよ!」

「それはね、お前がまだ小むs」

「それ以上言うな!」

「馬鹿にして！」

インデックスの目つきもヤバいな

いつの日か見た第一位の目つきのような・・・

いや、あっちのほうが怖かったわ

チラッとしか見てないけどな。

「はぁ・・・」

上条がため息をつき自分の右手を見て何か思いふけている。

「出来た！」

すると、インデックスが毛布をバツと取り払う。

すると所々が安全ピンで応急処置された歩く教会を来たインデックスが現れた。

「何だ？ そのアイアンメイデン？」

「日本では針の筵と言う！」

何だこの受け答え。

すると上条さんがあっと声を上げ、携帯を見る。

「そうだ、補習！」

俺、これから学校行かなきゃなんねえんだけど、お前どうすんの？
ここに残るなら鍵渡すけど？」

上条さん・・・

お前優し過ぎるだろ・・・

普通は初対面の奴に鍵は渡さねえ

「いい、出てく

何時までも居ると連中此処まで来そうだし。

君だってこの部屋ごと爆発されたくはないよね。」

そういうインデックスは玄関へと行く。

「お、おい！ 待てよ！」

上条が慌てて追いかける。

だが慌てたのがいけなかった。

「うおっ!？」

微妙な段差に躓き、携帯を前方へ放り出し、ヨロヨロとバランスを崩し携帯を踏み碎いた。

携帯ってそこまでヤワだったけ？

「あゝあ・・・」

「君の右手、幸運とか神のご加護とか、そう言うのを纏めて消してしまってるんだと思うよ。」

「ああ？」

「なるほど、つまり不幸の原因はその右手と言うことか・・・」
幻想殺し改め幸運殺しでもいいんじゃない？

「そう言うこと！」

それを聞き、上条が膝から崩れ落ちた。

「・・・不幸だ・・・」

まあ、何だ、元気だせよ！

すると今までのギャグっぽい雰囲気から真剣な雰囲気に変わり。

「お前、ここを出てどっか行くあてでもあんのかよ！」

「・・・ここに居ると敵が来るから。」

「敵？」

「この服は魔力で動いてるからね。
それをもとにサーチ書けてるみたい何だよ。」

魔力・・・ねえ。

「さっきの魔力とかそんな全部なくなってるんじゃないのか？
一言言ってくれば、俺達が匿ってやるぞ？
こう見えて俺、結構強いんだぞ？」

炎を扱う奴に関しては絶対的な強さを発揮できます。

「大丈夫、教会まで逃げ切れれば匿ってもらえるから。」

「ちょっと待てよ、それが分かかって黙って放り出せるかよ!」

うーん、インデックスから言えば俺達は一般人だからなあ
巻き込みたくはないのか・・・

「それじゃ」

そして、インデックスは玄関から出て走り去って行く。

それを上条が追い

「困った事があったら、また来ていいからな!」

「うん! お腹が減ったらまた来る!」

とインデックスが返し、お掃除ロボットに追われながら行った。

「はあ、ってやっべ補習!」

「頑張れよー!」

「あ、ああ!じゃあな!左天!」

「ふう、じゃ俺は街に繰り出しましょうかね・・・」

インデックスがちよつと心配だし。
不審者っぽいのがいないか見て回るか。

・
・
・
・
・
・

さて、と・・・
速攻不思議な人を見つけたんだが。

「片方の足の付け根あたりまでザックリいったジーンズをはき、
ソを出してるお姉さん・・・？」

まあ此処までなら街で見かけなくもないが・・・
場所だよなあ・・・

屋上に立って色々見回してたらそらあ怪しく感じますよ。

もしかしインデックス言ってたのあれか？

いや、違うかね？

どう見ても魔術って感じがしないしな・・・

今俺、昼飯食ってるからなあ、インデックスにあげて食べてなかったから。

たまたま外に目を向けたらコレだよ。

此処から第四波動は届くけど・・・

違ったらとんでもないしな・・・

とか何とか考えてたら、お姉さん、どっか行きました。

凄い跳躍で。

あれだったかもな・・・

しまった・・・。

何やってんだ俺！

すぐに会計をしてお姉さんが飛んでいった、方向に向かってみる。

・
・
・
・
・
・
・
・
夕方。

結局、見あたらなかった・・・

なんという・・・

うーん、とりあえず、上条の所に戻って見るか。
もう補習終わってるだろ。

と思っていたらいきなりピーピーピーピー！ と警報が
り始めた。

「何だ？」

警報の鳴ってる場所を見てみたら物凄いスピードで上条と電撃中学
生が走っていった。

「あのピカチュウ、何かやったんだな・・・」

ピーピー鳴り止まない警報を背に俺も二人を追う事にした。

第三話―第四波動―（前書き）

分かってるよ

ステイルはそんなに弱くないって。

でもね第四波動無双をしたかったんだよ・・・

第三話―第四波動―

さて、と。

上条達が走るの速すぎて見失ったわ・・・

まあ上条さん家にいきゃあいいか。

「・・・何か嫌な予感がするな。
ちよいと急ぐか・・・」

・
・
・
・
・

走る。

上条のいるアパートまで走る。

「・・・!？」

火? マンションの方からか!？」

いきなり現れた熱がマンションの方から感知出来た。

「嫌な予感が当たったって事か!」

走りながら熱エネルギーを吸収し体の隅々に巡らせる。

ちょっとしたエネルギーの使い方。

身体能力を上げる事が出来る。

それにより走る速度を上げ、マンションを目指す。
・

・
・
・
・
・
・

「着いた！　　ってうお！？」

何だこの嫌悪感？

こっちくんなみたいな・・・」

いや、あんだけ出かい熱エネルギーが出てんだ行くしかねえよ！

「――その名は炎、その役は剣！　権限せよ！我が身を喰らい
て力となせ！」

うわぁ・・・

ガチ魔術じゃん・・・

すげえ熱量・・・

何あれ？

「魔女狩りの王、イノケンティウス。
意味は必ず殺す。」

イノケンティウスって・・・

いや、それはいいや。

「上条！ 大丈夫か？」

「左天！」

「マジに何あれ！？」

人型の炎とか初めてみるわ！

「インデックスの言っていた敵みたいだ！」

「あれがか！ てかインデックスは？」

「あいつの後ろで倒れてる！」

マジか、超邪魔だなアレ

「おや？ もう一人来たのかい？

人払いを張っていたんだがね。

ま、何人来ても無意味だけどね。」

あいつウゼエ！

そうこうしてる内に炎が襲いかかってくる！

「くっ！ 邪魔だ！」

上条が幻想殺しで打ち消す。

炎はキイイイイ！！と鳴く。

「くう、耳障りな、炎が鳴き声だすな！」

しかし打ち消した炎は一ヶ所に集まり再び人型になる。

「なっ！？」

炎の手から武器が現れ。

俺達に振り下ろした。

それを再び上条が幻想殺しで防ぐ。

「ぐう・・・！」

だが防ぐだけで打ち消すことができない。

「何で！ 右手が通用しない！？

この炎、消滅した直後に復活してるんだ！」

「なるほど、なら上条交代だ！

俺が全部吸い取る！」

炎に手を入れ吸収する。

「おおおおおお！！！！！！！！」

復活するよりも早く熱を吸収する。

「何！？ 何だあれは？
魔女狩りの王が！」

「イノケンティウスだかイケメンティウスだがしらんが俺に吸えない熱はない！」

炎をすべて吸い取る。

「はあ、想像以上に熱エネルギーを吸い取れたわ・・・」

「左天！ 大丈夫か？」

「おう、ぶっちゃけまだまだ吸える。」

「バカな・・・
イノケンティウスが・・・！」

「上条！ インデックスを！」

「ああ！」

俺の言葉に上条は頷くとあの長身魔術師の横を抜け、インデックスを抱きかかえる。

「しまっ！」

上条へ向かい、何かをしようとしてる所にドロップキックをかます。

「ぐっ！」

「さて、さっきの炎、かなりの熱エネルギーだったよ。ちよっと倍に返すから受けてくれない？」

手のひらを魔術師に向ける。

「くっ！ 魔女狩りの王！」

魔術師の言葉で再び現れる炎。

「まだ出せたのか・・・」

「ここに張り巡らせたルーンを排除しないかぎり魔女狩りの王は復活する！」

なるほど、ルーンね。

まあいいや、それはおいおいだよ。

「まあ、それごとぶっ飛ばすさ。
受けてみる。」

熱エネルギーを増幅。
放出する！

【第四波動！！】

手のひらから極太のレーザーのような炎がイノケンティウスごと、魔術師を飲み込む。

「なっ！？　　こんな！？」

そして第四波動はそのままマンションの壁をぶち抜き飛んでいった。

「ま、摂取六千度くらいかな？」

「殺したのか？」

「いや、多分生きてるな。」

あのイノケンティウスってのに一瞬止められたからな。
その間に逃げれるだろ。

まあ、少なからずダメージも受けてるだろうが」

「そうか・・・」

「まあ、何だ、次会った時に殴り飛ばしやいいさ。
それよりインデックスは大丈夫か？」

「そうだ！ インデックス！ 大丈夫か！？」

さて、俺は・・・

「上条、インデックスを見てやっててくれ、俺はあいつが言っていた。
ルーンってのを排除していくから。」

「ああ、わかった。」

さて、ルーンね、ルーン。

どこにあんだろ？

見たことないからな・・・

ま、虱潰しに探すか・・・

・ ・ ・ ・ ・
めっちゃあったわ・・・
なにこれ呪い？

紙なのに何故か燃えなかったから、熱で風を作ってまとめてぶっ飛ばした。

てか外に消防が来ててこまる。

まあいいや、たまたまいました的な感じで出よう。

「ふう、まったく何だよ。

いきなり火事とかついて無いぜ！」

「ジャツジメントですわ。」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「いやああああ！ 出たあ！」

「なっ！？ 失礼ではございませんこと！？」

まさか消防だけじゃなく、ジャツジメントさんもいるとは・・・

「何やってんの」

「うわ、ピカチュウもいた。」

「だ・れ・が！ピカチュウですって？」

ジャッジメントのレベル4とレベル5 第三位とは・・・

「何してんの？」

「それはこちらの台詞です。」

あなた何故ここにいるんですの？」

「いやー、友達の家に行ったらいきなり炎とか出てきたもので・・・」

「怪しいですよ。」

そう言えばあなた、炎系統の能力者でしたわよね？
まさか・・・」

あらぬ誤解が・・・！

「誤解だ！ 第一俺は炎系統じゃなくて第四波動なもの！」

「その第四波動ってのが未だに不思議なのよね。」

俺自身まだ把握仕切れてないしな！

「マンションの壁が丸く溶けた状態で残されているんですが、何かしりませんか？」

第四波動だな・・・

第四波動でぶち抜いた壁だな・・・

「・・・・・・・・知りませぬ。」

「その間は何ですか？」

「・・・・・・・・ごめん。」

俺泣いていいよね。

「何か知ってるんですね。」

「いや、火事の原因の能力者を第四波動で吹っ飛ばしたただけだから
なあ・・・

摂取六千度くらいで。」

「逮捕ですわ」

ちょっ!?

待って待って!

「殺しては無いですよ!?

逃げられたし!

そ、そうだな、レベル4くらいだったんじゃないか!?

魔術師だったと言えんな・・・

「そうなんですの。
容姿は？」

「暗かったので顔わ見てません。
ただ長身ってくらいかな。」

「そうですか、分かりましたわ。」

ふう、ジャツジメントってかパンダの相手は疲れるな・・・

【白井黒子】 ↓白黒 ↓パンダね。

「それにしても摂取六千度って凄いわね。」

「まあ、熱の吸収量で威力が変わるしなあ
今んとこ最高で1400万度かなあ・・・
核融合炉のプラズマの熱でも吸収したら一億度くらい行くかもだが
な。」

「それで、何であんた、第八位なのよ？」

そんな事を言われましても。

「みんな強いしねー
てか第八位なら他の超能力者からの下克上とかないし。」

「はあ、そう。」

ため息をつかれても・・・

「てか、俺行くところあるんだよ！
悪い、じゃあな！」

俺は二人と別れ上条の方へと向かった。

第四話ー必要悪の教会ーちよいと追加修正。(前書き)

御坂さんのレールガンとか麦野さんのメルトダウナーとか熱エネルギーとして吸収出来るかな？

第四話―必要悪の教会―ちよいと追加修正。

しまった☆

上条がどこに行ったかわからねえ・・・

「ん？ さっちゃん！

こんな所で何してるんだにゃー？」

「おお、つつちー！

カミヤん見なかったか？」

コイツの名前は【土御門 元春】

上条に続き、俺の友人第2号だ。

ちなみに左天だからさっちゃん。

「いや、見てないぜい。どうかしたのかにゃー？」

「いやあ、只今、上条のスーパーお節介タイムが発動しててな。」

「またかにゃー

カミヤんもようやるぜい。」

「全くだ。

まあ、見てないならいい。
そんじゃ、俺は行くわ。」

土御門と別れ、再び上条を探してみる。

あいつ携帯壊れたからな・・・
どこにいったらうな。

「・・・・・・・・」

・ ・ ・ ・ ・

「大丈夫ですか？ ステイル。」

「はあ、やれやれ、まさか自分の得意とする炎で焼き殺されそうになるなんてね。」

魔術師【ステイル・マグヌス】は煙草を取り出し火を付ける。

「あれが超能力ですか。想像以上に強大ですね。」

2mはゆうに超えた長さの刀を持つ女性が言う。

「僕の魔女狩りの王を簡単^{イノケンティウス}に消し、いや吸収か、そしてそれを倍にして返されるとはね。」

ステイルは少しイラつきながら煙草をふかす。

「それにもう一人の、アレの右手は何なんだ。」

「その事で少しその少年の身元を探りました。

少なくとも魔術師や異能者の類ではない、としか。」

「何だ？　もしやアレが只の高校生とでも言うつもりかい？」

そう言い、煙草をもう一本取り出し火を付ける。

「止めてくれよ、何の力も持たない素人が僕の魔術を退けられる程、世界は優しく造られちゃいない。」

「そうですね。」

寧ろ問題なのは彼がただの喧嘩っばいダメ学生というカテゴリーになっている事です。」

ステイルは煙を吐き出し

「情報の意図的な封鎖、か・・・
もう一人の方はどうなんだい？」

「彼に関しては

名は『左天』 この学園都市にいる八人の超能力者（レベル5）の一人、『第八位 第四波動』くらいです。
名に関しては偽名。

学園都市へやって来る以前の事は何もありませんでした。」

「そうか・・・

第四波動、か、厄介な能力だ・・・

悔しいが奴には僕との相性が良すぎる・・・
勿論、悪い意味でね。
奴にとってはいい意味だけど。」

溜め息を尽きながらステイルは言う。

「敵戦力は未知数。

対してこちらの増援はなし。

今まで以上に骨が折れそうですね。」

・ ・ ・ ・ ・

やれやれ、昨日は結局、上条は見当たらなかったな・・・

朝になっちまったよ。

てかもう昼だ。

本当どこいったんだ。

「つて、おや？あれは・・・」

ふと目についた喫茶店に見知った顔が・・・

取り敢えず腹も減ったし入るか。

喫茶店に入り席につく。
アレって御坂達だよな？

御坂、パンダ子（黒子）、いつか見たことがあるような花飾りちゃん、髪がロングの子

あとは白衣の美人さん。

何やってんだろ？

「お客様、ご注文はお決まりでしょうか？」

そうこうしてる内に店員が来た。

「あ、じゃあ、コレで」

手早く注文を済ませ、御坂達を探偵のごとく観察してみる。

「ああ！？」

するとロングの子が白衣美人さんにコップの中身をぶちまけた。

「わー！すいません！すいません！！」

「気にしないでいい、かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば・・・」

なん・・・だと？

あの美人さん、人がいる中でスカートとストッキングを脱ぎ始めたぞ！？

か、神が！神が降臨したぞ！

写メ写メ！

自分でも驚くべき速さで携帯のカメラモードを起動する。

ピロリロリ〜ン♪

・
・
・
・
・
・
・

音が、響いた・・・

少なくとも、御坂達はこちらに振り向く。

「あ、あんた・・・！！！」

やべえ、御坂達からしたら俺、美人さんの下着撮った変態じゃん。

ジャツジメントが・・・

「・・・ふう」

俺は清々しい笑顔を浮かべ

「あ、待ちなさい！！！」

全力で逃亡した。

・
・
・
・
・

・
てかやっぱり上条がみあたらん。

逃げ出したから飯も食えなかったし……

おまけに、ちよつと戦闘しちゃったし……

「やれやれ、って、おや？ あれは我らが合法ロリ、小萌先生ではないか。」

本当に子供にしか見えんよなあ……

不老説があるがマジなんじゃねえの？

「小萌先生ー」

「え？ あっ、左天ちゃん！」

俺の呼び声に気づき、手を振ってくる。

「左天ちゃん、こんな所でどうかしたんですか？」

「先生、上条さんを見てないですか？」

「上条ちゃん？ 上条ちゃんなら今、先生の家にいるですよ？」

なん……だと？

ま、まさか上条……

先生に手を……

「今はインデックスちゃんとお留守番してもらってるです。」

・・・なあくんだ。

いや、当たり前か・・・

それはそうと

「インデックスも居るのか良かった。」

「左天ちゃんもインデックスちゃんの事知ってるです?」

「ええ、まあ。」

じゃ、ちよつと小萌先生の家寄って行っただけですかね?」

「はい、いいですよ」

でもプライベートな所を覗いちゃ駄目ですよ?」

そう言われたら覗きたく・・・

冗談です、はい。

そして先生と別れ先生の住むアパートへと向かった。

・・・
ガチャつと。

「よう。 元気か?」

「左天! どうしてここが・・・」

上条が驚いた顔をして問いかけて来る。

「小萌先生にバッタリ会ってな、聞いたんだよ。それよりインデックスは大丈夫なのか？」

「うん！ この通り、もう何ともないよ！」

良かった良かった。

「そいつは良かった。

上条も無事か？」

「ああ、俺も何ともない。」

二人ともあの後、別の魔術師に遭遇したりはしなかったみたいだな。

・ ・ ・ ・ ・

で、何やかんやで小萌先生に夕飯をご馳走してもらい。

銭湯に行こう！ 的な話になった。

「おっふる♪おっふる♪おっふる♪」

インデックスが上機嫌だ。

「って、あ、やべっ、忘れ物した。

上条、インデックス、ちよいと取って来るから先行っててくれ。」

「分かった。」

じゃ、急いで取りに行くか。

・
・
・
・
・

まあ何だ。

アイツらいねえし。

忘れ物取って来てみれば、奴らがいなかった不思議！

そんなに時間立ってないはずなんだがな？

まあいいか、取りあえず俺は俺のペースで行くか。

・
・
・
・
・
・

「たくっ、噛むだけ噛んで、一人でさっさと行っちまいやがって・

・

左天の事忘れてるだろ。」

上条は恐らくインデックスに噛まれたであろう噛み痕のある腕に息

を吹きかけながら歩く。

すると、

「・・・？ あれ？

人が、いない？」

先ほどまで賑わっていた交差点が人、一人いなくなっていた。

「人払いのルーンを刻んでるだけですよ。」

そう言い、現れたのはインデックスを狙う魔術師の一人だった。

「！！ テメエは！」

「【神裂 火織】、と申します。」

第五話ー完全記憶能力ー（前書き）

神裂ブチギレ& a m p; 上条説教が消滅しました▽

第五話 完全記憶能力

――学園都市 窓のないビル――

そこに赤い液体に満たされた巨大な円筒器に緑の手術衣を来た【男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える】人間が逆さまに浸かっていた。

学園都市統括理事長 【アレイスターⅡクロウリー】である。

「どうした。」

アレイスターが目の前の男に問いかける。

「“アレ”が魔術師と接触、更には撃退したもようです。」

「そうか、【幻想殺し】と一緒にいればこうなる事は分かっていたが。」

「どうしますか？」

アレイスターは目を閉じ静かな声で言う。

「これより、“アレ”をレベル5からレベル0【無能力者】とする。」

「よろしいのですか？」

「元々“アレ”の能力は超能力や魔術に分類されないものだ、それで構わない。」

・ ・ ・ ・ ・

「出来ればもう一つの名は語りたく無いのですが・・・」

神裂が言う。

「？ もう一つ・・・？」

上条が疑問を口にする。それを神裂が答えた。

「魔法名ですよ。」

「！」

その言葉で上条はステイルを思い出す。

確か奴も言っていた。

「アイツと同じ、魔術結社の・・・！」

「率直に言います、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが。」

神裂が静かに言う。

「嫌だと言ったら？」

「仕方ありません。」

神裂が腰の刀に手を掛ける。

「名乗ってから彼女を保護するまで！」

そして刀を抜く、瞬間。

「っ!？」

神裂はその場から飛び退る。

そして神裂がいた場所に跳び蹴り、所謂ライダーキックが突き刺さる。

「ぬお、かなり不意打ちだったんだがな」

「左天！」

・ ・ ・

さて、と

まさか上条が襲われていたとは・・・

人一杯いるし、仕掛けては来ないだろと思ったら人払いとか言うの

の存在を忘れてたぜ。

ここら一帯すげえ嫌悪感がして回れ右して帰ってたけど、マンシヨンと同じだったから無理矢理入ったぜ・・・

「大丈夫か？ 当麻？

てかインデックスは？」

「ああ。

インデックスは・・・先に行った。」

上条が腕をさり気なく隠す。

噛み後・・・

ああ、何か喧嘩したのね。

「異能力者ですか。

人払いを張っていたのですがね。」

魔術師が言う。

てか、アレ？ あの時見たお姉さんじゃね？

やっぱり魔術師だったのか・・・

「無理矢理通ったさ、あれ止めた方がいいぜ
途中吐きそうだったし。」

ああ言うのはもう嫌です。

「さて、上条。」

「ああ、何だ？」

「お前はインデックスの方へ行け、もう一人がいたら大変だからな。」

上条が驚いた顔をする。

「・・・大丈夫なのか？」

「ああ、見たところ物理っぽいしな。
お前の幻想殺しも聞かないだろうよ。
だからここは俺に任せなさい。」

上条は目を閉じ深呼吸する。

そして目を開き。

「分かった！ 気を付けろよ！」

走りだした。

それを魔術師が逃すまいと攻撃を仕掛ける。

「逃しません！」

「逃すよ。」

魔術師へ向かい、第四波動（弱）を放つ。

「くっ」

魔術師はそれを避ける。

うんうん、上条さんは無事行けたな。

「サムライウエスタン、取り敢えず今は俺が相手だ。」

「あくまでも抵抗すると言う事ですか・・・」

「そう言うこった。」

魔術師が刀に手を掛ける、すると次の瞬間、俺の頬、肩、腕、足に斬り傷が付いた。

「な・・・に？」

何かが通り抜けた？

斬撃・・・？

刀を目視出来ない速度で抜いたって言うのか？

「私の七天七刀がおりなす七閃の斬撃速度は一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。

必殺と言っても間違いありません。」

速すぎる・・・

人間に出せる速度か？

「はっ！ 七ばっかりだな！ 刀が長すぎるから物干し竿かと思っただぜ。ちゃんと扱えるんだな！」

俺は静かに熱を吸収しエネルギーを体中に巡らせる。

「さて、今のは油断したがこれから真面目に行くぞ。」

そう言った直後に第四波動を放つ。

魔術師はそれを難なく避ける。

「あなたの事はステイルから報告を受けています。
炎を吸収し増幅して放つ事が出来ると。」

やっぱ、あの魔術師生きてたか。

「ちょっと違うな。」

俺の能力は熱を吸収し放出できる能力だ。
こんな風に」

熱で風を作り出し突風を吹かせる。

相手が一瞬だけ目を閉じた隙に近づき、胴へ蹴りを入れる、が。

「！」

蹴りを入れた足に傷がつく。

「熱で小型の台風とか作れたり、エネルギーを体中に巡らせて身体能力を上げたりできるってんだが・・・
何だ？ワイヤーか？」

なるほどね、刀を抜いた訳じゃ無いのか。

「なるほど、確かに動きが変わりましたね。
しかし、残念でしたね。――七閃――」

「ぐっ!？」

至近距離からワイヤーによる斬撃を体中に受ける。

「はあ、何か魔術的な事で斬撃を飛ばしてるのかと思ったが・・・
存外、小細工が得意なんだな。
その刀、飾りか？」

俺の言葉に眉を寄せる。

「七天七刀は飾りではありません。
七閃をくぐり抜けた先には唯閃が待っています。
それに何より私は魔法名すら名乗っていません。
名乗らせないでください少年、私はもう、アレを二度とあれを名乗
りたくない。」

「なるほどねえ」
てか魔法名どころか名前すらしらねえし。」

上条は聞いたんだろうが俺は知らんぞ。

「・・・神裂 火織と申します。」

「ここに来て自己紹介とか、おかしなもんだな。
まあいいや、俺は左天、宜しくな、カミヤん二号」

俺の言葉に再び眉をよせる、神裂。

「さて、名前を聞いたついでに聞きたい事がある。」

「何ですか？」

「何であの子を追いつ回す？」

拳げ句、背中を斬るってどういうこつたい。」

「それ、は——」

「知ってるか？ あの子、記憶がないんだと

あんたら何したんだよ？ 何したらそこまで酷くなるんだよ？」

ふざけた理由を言ったら強風をぶち当てて、ひっくり返して、凍らせて、第四波動を零距离で撃ってやる。

「・・・って」

「あ？」

「私だって、好きでこんな事をしている訳ではありません！
私の所属する組織の名前は、【必要悪の教会^{ネセサリウス}】」

そろはインデックスが言っていた・・・

「イギリス正教の・・・インデックスと同じ？
どういう事だ？」

「彼女は私の同僚にして、大切な親友なんですよ・・・」

「何・・・？じゃあどうして？」

「私だって！ 彼女の背中を斬るつもりは無かった！
あれは・・・歩く教会が破壊されたとは知らず・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・上条おおおお！！！！！！

クソっ！ やっぱあの時俺が「俺の技を打ち消してみろよ」とか何とか言っときゃよかった！！

「彼女が絶対に傷付くはずがないから斬っただけ・・・
なのに・・・」

「でも、それでも！ 何で親友の背中を？」

「そうやって保護しないと、彼女が生きていられないからです。」

何か、理由があるのか？

「完全記憶能力」

「完全、記憶能力？」

見た物を一生忘れないって奴か？

「それが全ての、元凶です。」

元凶？

どういう事だ？

「完全記憶能力って、インデックスの言っていた10万3000冊の事か？」

神裂が頷く。

「全部、頭の中に入ってるんだってな。」

「人間の脳の容量は意外に小さい。」

ですが、知らない記憶を忘れる事で知らない内に脳を整理している。だから人間は生きて行ける。

ところが、彼女にはそれが出来ない。」

「……」

「街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、雨粒の一滴一滴の形まで、彼女の頭はそんなどうでもいい記憶で埋め尽くされてしまう。」

……ふむ。

「って事は、だ。」

インデックスが記憶喪失なのは……」

「そうです、私たちが消しました。」

やっぱりか……

「一応聞くが、何でだ？」

「そうしなければならなかったからです・・・
そうしなければ・・・」

彼女が死んでしまうからですよ・・・」

「・・・」

「彼女の脳の85%は10万3000冊の記憶のために使われています。」

そのため彼女は常人の15%しか脳を使えません。」

・・・85%、ね・・・

「その15%に記憶を続けければ、彼女の脳は・・・。」

「・・・」

「? どうしました?」

いや、どうしたも何も・・・

「それ、本気で言ってるのか?

本気で言ってるんなら・・・

俺は今から大爆笑しよう。」

「なっ、なにを・・・!?」

そんな驚かれても、ねえ。

「取り敢えず言おう、イギリス正教は馬鹿ばっかか?」

「何が言いたいのです!」

睨むな睨むな・・・

「いいか、お前らは人の脳つてのを甘く見過ぎだ。

脳つてのはザッと140年の記憶を貯めておける。

現に世界には何人か完全記憶能力を持つ人達がいる、その人達は完全記憶能力だからって早死にしたりせず普通に一生を終えられるんだ。

よく考えろ、たった一年で残りの15%が埋め尽くされるなら完全記憶能力を持つ人間は皆、6歳か7歳で死んでる。」

「な・・・それは・・・」

マジで知らなかったって感じか。

「脳にはエピソード記憶、意味記憶つてのがあるんだが（あと手続き記憶、プライミング記憶）それぞれに覚える記憶が分けられている。

10万3000冊を記憶してるのは意味記憶とかそこら辺だろ？

“ たった ” 10万3000冊を覚えた所で85%も使うわけ無いだろ。

まあ簡単な話、お前ら騙されてるんじゃないか？

「そん・・・な・・・」

それは、本当なのですか？」

「ま、信じるか信じないかはあなた次第ですってね。

まだ時間はあるんだろ？よく考えてみるんだな。」

今の神裂には戦う意識はもう無くなってるみたいだな・・・

「それじゃあな、俺達は俺達でインデックスを救う方法を探す、じゃあな。」

驚愕やら何やらして、混乱している神裂を置いて、俺は上条たちがいるであろう場所へ向かって歩きだした。

第七話 ドラゴンブレスー（前書き）

最初に言っておく！

ステイルさんごめんなさい！！（土下寝

第七話 ドラゴンブレス

「――と、言うわけだな」

あれから神裂を放置した後に上条と合流して小萌先生の家に戻りインデックスと先生が眠った後に神裂との会話を上条に話した。

「完全記憶能力か……」

あいつらはインデックスが死ぬのを防ぐために追い回してた訳か……」

「まあ俺の推測だが……」

あいつらは上の奴らに騙されてるんだと思う。

10万3000冊を記憶した程度じゃ、脳の85%も埋め尽くされる訳ないからな」

大方、インデックスを手放したくないから、とか言う理由だろうよ。

「じゃあ、魔術的な事なのか？」

「まあ、多分な。」

そこでお前の出番だ

インデックスの脳の圧迫が魔術的な事なら……」

「そうか、俺の右手が通用する！」

そう言う事。

すると上条がおもむろに右手をインデックスの頭に乗せる。

「……………何も起きないな……………」

「まあ、流石にそんなに簡単な訳ないか？
ううむ、魔術的な物ならインデックスの体のどこかにあると思うんだが……………」

と、言っても体を弄るわけにもいかんしな……………」

「脳に直接とかじゃないよな……………」
それなら幻想殺しも効かんだろうし……………」

さて、どうするか、と考えている時、小萌先生が目をごすりながら起きてきた。

「上条ちゃあん、左天ちゃあん……………」
何してるんですか？

早く寝ないとダメなのです……………ZZZZ」

で、寝た。

うるさかったか？

「取り敢えず今日は寝るか……………」
明日になってまた考えよう」

「ああ、分かった。
……………インデックス、絶対助けてやるからな……………」
……………それじゃあ、お休み。

・

・ ・ ・ ・ ・

「翌日」

「・・・あゝあ・・・」

「あ！ さてんがやっと起きたんだよ！」

「大丈夫か、お前」

いくら起こしても、起きないから心配したぞ」

あれ？ 俺起こされてたの？

疲れてたのかな？

「昨日、ズタボロにやられたからかもな」

ズタボロって程でもないがな。

「……ゴメンね、さてん」

「ああ、気にするな。この程度の傷は超電磁砲に比べたらかすり傷だよ。」

「お前も撃たれた事あるのか……」

「ああ、ちょっと調子乗ってたら、な。

第四波動で必死に防いだけど……」

あと、お前に撃つ時より威力は無かったがな。

「何の話？」

きよとん、とした顔でインデックスが聞いてくる。

「いや、お前には関係のない話だ……」

「ああ……」

???と頭に？マークを立てるインデックスなのであった。

「ところで、先生は？」

「ああ、先生ならちょっと出掛けて来るってさ」

「そうか」

コンコン！

そうこうしていると玄関の扉が叩かれた。
はーい、とインデックスが返事をする。

「こもえかな？」

『あれ？ 家の前で何やってるんです？』

小萌先生の声が聞こえ扉が開かれる。

「上条ちゃん、何だか知らないけどお客さんみたいです」

そして、玄関に入って来たのは。

「!! お前ら……」

神裂とステイルだった。

てか先生……

神裂は目に見えて物騒なモン持ってるのに、普通に通すって……
あと、ステイルもかなり変な格好なのに……

「デメエら! 何しに来た!!」

上条が怒鳴る。

「そう身構えないでくれよ

今日は君じゃなく、その君に用があるんだ」

そういい、視線が俺に向く。

……?

俺は不思議に思いながら後ろを振り向く。

? 誰もいないよなあ……

「君の事だ!」

あ、やっぱ俺か……

「……何で俺？」

・ ・ ・ ・ ・

と、言うわけで二人に付いて、とあるビルの屋上に来ました。

インデックスにかなり止められたけどね。

「で？ 何の用だ？」

ここでドンパチやるんなら、全力で逃げるぞ。」

熱吸収、熱吸収、と。

「そんな事はしません。用と言うのは昨日の事です」

昨日の？

話した事かな？

「昨日、君は僕達が騙されてるんじゃないか、と言ったね？
その事をイギリス正教へと確認を取った。」

ほうほう。

「それで？」

「『兎に角連れ戻せ。』だそうだ。

インデックスの脳の事については何も言わなかった」

「ほお、そうなのか。

だが、それを俺に話す意味がわからん」

何のメリットもないと思うが・・・

「まさかと思うが、お前ら……」

「今まであの子にして来た事は分かっています。これが勝手な事だと言うことも

ですが、あの子の痛みが、苦しみが、人為的なモノだったのであれば許す事はできない。

例え命令に背いたとしても絶対にあの子を救い出します！」

・・・

コイツらは本当にインデックスが大事なんだな……

「まあ、お前らの言いたい事は分かった。

俺は別に反対はしないよ。

でもなあ」

「なんです？」

「インデックスはお前らを完全に悪として捉えてしまってるからな」

上条はこの事を反対しないだろうがな。

「それは……」

「だからさあ、インデックスの体のどこかにおかしな場所とかは無かったか？」

脳の負担が魔術的な事なら何かあると思うんだが……」

体内だと上条さんも打つ手なしだよなあ……

「……………いえ、そのような物は何処にも無かった筈です。」

「そうか……」

よし、なら取り敢えず今はインデックスに近づくな、今日の夜、インデックスが寝た後にまた俺達の所に来い。」

そう言い、何かまだ言っていたが強引に帰らせて、俺も先生の家へ戻った。

「左天！ 大丈夫だったか？」

戻ると上条が出迎えてくれた。

「ああ、それよりインデックスは？」

「何か調子が悪いからって今は寝てる。」

もうそろそろタイムリミットなのか……

急がんと……

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

一夜一

小萌先生が銭湯に行くとき家を出て行った後
さっきの話を上条へ話した。

「って訳だ。」

「そうか、あいつらが……」

「もうそろそろ来るかもしれんな。
取り敢えず俺達は何かないから調べよう。」

それから色々と調べた。
インデックスの頭に再び幻想殺しを当てたり、ギリギリな場所に幻想殺しを当ててみたりしたが何も起こらなかった。

「どこだろうな？
絶対何かあるはず何だが……」

どこかないか？
普段触ったり見たりしない端からじゃ全く分からない場所……

「……口、とか……」

上条がポツリと呟く。

「そうか、口の中はまだ見ていない！
ナイス上条さん！」

そしてインデックスの口をゆっくりと開け、中を見る。

すると――

「あっ……た」

インデックスの喉に何かよく分からない文字が書かれてあった。

「これか……
上条！」

「ああ……」

上条が右手をインデックスの口に入れて行く。

それを苦しそうにインデックスが呻く。

「もう……少し……」

そして――

「うあっ!?!」

バチッと言う音が聞こえインデックスが上条の指を思いきり噛んだ。

インデックスがユラリと起き上がる。

そして此方に振り向き

「!？」

衝撃波のようなモノが飛んできた。

そしてそれは玄関の扉をも吹き飛ばす。

『警告 第三章 第二節第一から第三までの全結界の貫通を確認。』

「「!？」」

ステイルと神裂も現れ驚愕している。

『再生準備――失敗。
自動再生は不可能。』

現状10万3000冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を優先します。』

そう、インデックスが淡々と述べる。

何かヤバイな……

『書庫内の10万3000冊による結界を貫通した魔術の術式を逆算――失敗。』

該当する魔術は発見できず。

術式の構成を暴き、対侵入者用のローカルウェポンを組み上げます。

――侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。』

インデックスの正面に模様が現れる。

『これより特定魔術【聖ジョージの聖域】を発動。
侵入者を破壊します。』

「……………」

上条が拳を握り締める。

「そういや、一つだけ聞いて無かったっけか？
超能力者でもないお前が魔術を使えない訳。」

インデックスに問いかける。

しかしインデックスは何の表情も変えずただ“侵入者”の破壊だけ
を実行する。

上条へ向けて、攻撃が放たれる。

それを上条は幻想殺しで受け止め耐える。

「ぐう……！！」

「まさか……」

「何であの子が、魔術を……」

「恐らく、魔術が使えないって事も嘘だったんだろうよ。」

その言葉に二人の表情が変わる。

「冷静に考えて見ろ！」

禁書目録なんて残酷な役目をコイツに背負わせやがった連中が、
メエら下っ端に心優しく真実を全部話すと思ってるのか！」

上条が声を張り上げ言う。

「何ならインデックス本人に直接聞いてみりゃいいだろうが！」

『【聖ジョージの聖域】は侵入者に対して効果が見られません。
他の術式へ切り替え、侵入者の破壊を継続します。』

上条に対する攻撃が更に強まる。

「ぐううう……！！！！」

右手から血が噴き出す。

「上条！！」

「Salvare000！！！」

神裂がワイヤーで、畳ごとインデックスを床へ倒す。

そのまま攻撃が天井を貫く。

貫いた天井から白い羽が降ってくる。

「？ 何だ、これ……」

「これは！ 竜王の殺息！？」
ドラゴンプレス

伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃とどうぎです！
それにたった一枚でも触れてしまえば大変な事に……」

マジか……

一枚でも当たったら致命傷……
怖いな……

するとインデックスが起き上がり、上条へ向けて、再び攻撃する。

【第四波動……！】

それを第四波動で防ぐ。

「今だ……！ 行けっ……！ 当麻あ……！」

その言葉に上条がインデックスへと走る。

『警告、第十六章 第十三冊

新たな敵兵を確認。

戦闘思考を変更。

戦場の検索を開始——完了。

現状最も難易度の高い敵兵【上条 当麻】の破壊を最優先します。」

インデックスの攻撃が強まり第四波動が押される。

「ぐ……ヤバい、熱が……！！！！」

「Fortis931……！！」

ステイルがルーンを張り巡らし、イノケンティウスを出す。

コレなら!!

「ステイルすまない！
ソレ貰うぞ!!」

イノケンティウスを空いている左手で吸収する。
そして。

【二重……第四波動!!】

左手からも第四波動を放出しインデックスの攻撃を押し戻す。

『警告 炎の術式の逆算――失敗。

該当する魔術は発見できず。

これにより【聖ジョージの聖域】を第二段階へ移行。』

インデックスの攻撃が更に強くなる。

「なっ、ぐっ……!!」

まだ強くなるのか!?

クソッ、上条! 早く!

上条はもう既にインデックスのすぐ正面まで来ていた。

『神様、この世界があんたの作ったシステムの通りに動いてるって
んなら……!!』

右手を振り上げ

「まずは、その幻想をぶち殺す!!」

インデックスの頭に押し当てる。

瞬間、全てが嘘のように消え去った。

『警……告 最、終……章………』

インデックスが床へ倒れた。

「ふう……」

上条がインデックスに近づき抱き起こす。

だが――

「っ!?! 当麻!!」

俺達の言葉に振り返った瞬間、上条の頭にドラゴンブレスが落ちた――。

第八話一記憶破壊一（前書き）

ああ、強引だなく。

第八話―記憶破壊―

「ふうむ、謎の閃光に監視用の衛星が一機撃ち抜かれたって話だし、君と後二人、IDを持たない人間がこの街に入り込んでいたらしい。」

という事とは無関係なのかな？」

「さあ？」

カエルだ！ カエル顔の先生だ！

カエルなのに冥土返し……
胸が熱くなるな。

あれから上条を病院に運び、夜が明けました。

今はインデックスと俺がカエル先生と話しをしていました。

「所でその手紙、あの二人から送られた物だよねえ？」

コレか……

ステイルから渡された手紙……

一応上条と俺宛てっぽい。

取り敢えず読むか……

「えーと？ 何々？」

『挨拶は無駄なので省かせて貰うよ。
全くよくやってくれたなこの野郎共。』

と、言いたい所だけど、その個人的な思いの猛をぶつけてしまうと世界中の木々を残らず切り倒しても紙が足りなくなるので止めておくよ。』

うわっ、何だコイツ、そんなにあの時イノケンティウスを吸収した事怒ってるのか？

『必要最低限の礼儀として手伝って貰った君達にあの子とそれを取り巻く環境について説明しておく。』

イギリス正教はあの子を大至急連れ戻したがってたけど、僕達を騙していた事の説明を求めたら、あっさり現状維持ときやがった。

実際には様子見と言うのが正しいのかな
僕個人としては一瞬一秒でもあの子の側に君達がいるのを許せないんだけど。』

うん、もうツンデレって事でいいか

スタイルはツンデレ、OK！

『ちなみに、これは別に諦めて君達にあの子を譲ると言う意味ではないよ。』

僕達は情報を集め、しかるべき装備を整え次第に、あの子の回収に挑むつもりだ。

寝首を書くのは趣味じゃないので首はよく洗って待っているように。』

やれやれ、インデックスが好きなのは分かったが何か物騒だな……

近い内にまた会いそうな気がしないでもない。

『ああ、ちなみに、この手紙は読み終われば消滅するよ。』

え？

と、次の瞬間、手紙がズバン！と音を立ててなくなった。

「あいつ次会ったら殴る」

「な、中々過激なお友達だね？

液化爆薬でも染み込ませてあったのかな？」

ふと、隣を見るとインデックスが悲しそうな顔をしていた。

「……あの少年の事なら直接確かめた方が早い、と言いたい所だけ
どね……」

ま、本人の前でショックを受けるのは失礼だから手っ取り早くレッ
スン1だね。」

・ ・ ・ ・ ・

コンコン！

上条の病室のドアをノックする。

インデックスがかなり緊張して、十字を切っていたりする。

『はい？』

程なくして上条の声が聞こえた。

「ういゝす、入るぞ」

カラカラカラとね

部屋に入ると上条が何か絵になるような感じで座っていた。

絶妙な光の確度、カーテンの揺らめき……

「とうま！」

インデックスが上条の側まで駆け寄る。

「あの」

そんな上条の言葉で歩みを止める。

「あなた達、病室を間違えていませんか？」

……あのカエル先生の言った通り、記憶が……

・
・
・
・

『あれは記憶喪失と言うより記憶破壊だね。』

『記憶……破壊？』

『思い出を忘れたのではなく、物理的に脳細胞事破壊されてるね。
あれじゃ、思い出す事はまずないと思うよ
全く……頭蓋骨を開けてスタンガンでも突っ込んだのかい？』

・
・
・
・
・

あの軽そうな羽のたった一枚がそこまでのダメージを負わせるなんてな……

「あの、大丈夫ですか？
何か君、物凄く辛そうだ。」

上条がインデックスに言う。

「ううん、大丈夫だよ。
大丈夫に決まってるよ！」

上条の言葉にインデックスは首を振り笑顔を作る。

「あのひょっとして、俺達って知り合い？」

「知り合いも何も、毎日飯を食うような仲だぞ？」

俺が強引に且つ強制的に飯をたかりにいつてるだけだがな！

その言葉にもやはり上条は覚えがないという表情をする。

「ねえ、とうま？ 覚えてない？」

私達、学生寮のベランダで会ったんだよ」

「俺、学生寮なんかに住んでたの？」

「とうま、覚えてない？」

とうまの右手で私の歩く教会が壊れちゃったんだよ？」

「歩く教会ってなに？」

散歩か何かのクラブ？」

「とうま、覚えてない？」

とうまは私の為に魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「とうまって……誰の名前？」

「とうま……覚えてない？」

インデックスは、インデックスは、とうまの事、大好きだったんだよ？」

「ごめん、インデックスってなに？」

人の名前じゃ無いだろうから、俺、犬か猫でも飼ってたの？」

インデックスの全ての問いも上条は本当に覚えてないようだ。

インデックスの顔が悲しみに歪む。

そして――

「なあゝんつつてなあ!!」

と、上条の声の調子が元に戻り、そんな事をのたまった。

「え？」

「引っかった、引っかったゝ！

あっはっはっはっは!!」

上条が大笑いする。

それは本当に記憶が戻っているかのように。

「どうま……？」

「はっはっはっは……

犬猫、言われて何感極まってるんだ？

お前はアレですか？ 首輪趣味ですか？

もしかして俺にそう言うプレイ要求してるわけ？」

「あれ……？」

とうま、脳細胞が吹っ飛んで全部忘れたんじゃ……？」

インデックスが心底信じられないというような顔をする。

「なんか、忘れてた方が良かったみてえな言い方だな、おい。」

「え、だって……」

「あのカエル顔の医者の話じゃ、脳細胞が破壊されてるんだってなあ？」

だったら記憶喪失になっちまう筈だったってかあ？」

「筈、だった？」

本当に記憶が戻っているのか？

「だってさ、そのダメージってのが、魔術の力なんだろう？

だったら話しは簡単だ、自分の頭に右手を当てて自分に向かって幻想殺しをブチ当てちまえば問題ねえ！」

「イマジン……ブレイカー？」

「コレの事さ、要はダメージが脳に届く前にその魔術的なダメージを打ち消しちまえばいいってだけだろ？」

それを聞き、インデックスが安心したように脱力する。

「そるにしたって、普段散々人を振り回してたお前が今回の事でちったあ自分を見直す事が出来たんじゃねえの？」

「……ぐうううう！」

インデックスがブルブルと震えて怒りがMAXに入ったようです。

「あ、あれ……？」

そして上条は毎度のごとくインデックスに噛みつかれた。

• その際、病院内に悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

・ ・ ・ ・ ・

インデックスが怒ったまま、病室を出て行く。

「あゝあ。

大丈夫か？」

「死ぬ……本当に死ぬ……」

物凄い噛み痕だな……

「で？ あれで良かったのか？」

「な、何が？」

……………コイツは。

「さて問題です。

俺の名前は？」

「え？ え、え」と……」

「やっぱりな、記憶は戻ってないんだろ？」

「バレてたのか……」

当たり前だ、伊達に飯をたかりにいつてないぜ。

「俺、あの子には泣いて欲しくないなってそう思ったんだ。

これがどういう感情か分からないし、きっと思いだす事も出来ない
だろうけど……

確かにそう思う事が出来たんだ。」

上条……

「案外覚えているのかも知れないな。」

「……どこに？」

「そりゃあ決まってる。

心に、だよ。」

——原作介入、インデックス、魔術師襲来編 完——

主人公紹介その2

【左天^{さてん}】

この小説の一応主人公。

16歳

基本的、何かがないとだらけてたり、ボーっとしてたりする。

しかし何かがあれば（一話から八話までの事）打って変わって行動する。

最近は暇な時は大抵【第五波動】の練習をしている。

レベル5の第八位という地位が気に入らない。

もっと上の順位にいききたいとかではなく、むしろ順位から外れたい
と思っている。

最近、何故かレベル0になりちよつと考えたが気にしない事に決めた。

子供好き。

上条、土御門、青髪ピアスとは友人。

この3人が三馬鹿^{デルタフォース}と言われているのを自分を含めて馬鹿四重奏^{バカルテット}にしようと考えている。

能力関係で夏場は冷房として冬場は暖房として扱われたりする。

上条のようにフラグ体質ではない。

超電磁砲組とはなんやかんやで知り合い。

佐天さんの名前を聞き愕然とした（カブッてる的な意味で）

強さは微妙、でも本気を出せばもしかしたら強い？かもしれない。

使える技のバリエーション

【熱吸収】

そのままの通り周囲から熱を吸収できる。

急激に吸い取りあたりを凍りづけにすることもできる。

電熱なども吸収できる。

【熱放出】

吸い取った熱を放出する事が出来る。

急激に周囲を熱して火の海に変えたりもできる。

【熱感知】

そのまんまの通り熱を感知できる。

集中すればちょっとした火花の熱も感知できる。

【小型台風】

熱で気流を作り風を起こす。

頑張ればカマイタチのような風が起こるかもしれない。
名称…ストリームディストーション

【第四波動】

代名詞のような技。

熱を吸収し増幅して放出する。

かなりの攻撃、破壊力重視の技。

【二重第四波動】

第四波動を両手で別々の方向撃つ事ができる。

両方同じ方向に撃てば威力を上げる事が出来る。

【身体強化】

熱エネルギーを体中に巡らせて身体能力を上げる。

エネルギーが多ければ、瞬間移動かと錯覚する程のスピードを出せる、かもしれない。

【熱の壁】

熱の放出を工夫し、一方通行の反射のように常時展開出来る熱の壁。

しかし熱い、もの凄く熱い。

なので普段は使わない。

鉄などなら皮膚に触れる前に溶けて蒸発する。

【あついパンチ】

ある能力者の技を見た際にポツと思いついた技。

熱の壁のように腕に熱を纏わせて殴る。

熱の壁同様に凄く熱い。炎は出ない。

ネーミングは真似ただけ。

【第五波動】

まだ使えない。

暇な時は練習をしている。

しかし、妙な模様が現れる所までは出来るがその先が出来ない。

欠点

寒い地域などではあまり熱が吸収出来ないため威力が弱まる。

日本の冬程度なら問題ない。

番外編一 佐天さん一

これは二十一日（第四話）の左天が上条を探している時にあった話し。

なお、超電磁砲の時系列が微妙に違うが気にしないでいいレベル。

・ ・ ・ ・ ・

さてさて、本気で上条がいねえ

てか今日はマジで上条がいねえばかり言ってるな。

喫茶店から逃げて昼飯も食ってないしなあ

取り敢えずどっか行こう・・・

「とか思ったらあれは……

数時間前に見た、ロングちゃんじゃないか
何をなさってるんだろう？」

あそこは取り壊し直前の廃ビルじゃないか。

何かあんのかね？

・ ・ ・ ・ ・

「ヤバイヤバイ！

何だってこんな所に出くわすのよー！」

やんならあたしのいない所でやってよ、と彼女【佐天 涙子】は思う。

彼女は今、スキルアウトが太っている男性をリンチしている所に出くわしているのだ。

『と、とりあえずジャッジメントかアンチスキルに連絡しなきゃ……』

と、携帯を取り出し画面を開くが、そこにはバッテリー切れの文字。

『ヤバ！

最近充電してなかったから……』

「オイ！！　そこに誰かいんぞ！」

スキルアウトの1人が声を上げ、ビクッと肩が震える。

「何見てんだコラ」

「文句あるならこっち来いや」

「い、いえ、別に、ただの通りすがりでして」

佐天は慌てて頭を下げ、その場を離れる。

『しょ、しょうがないよね

あたしに何かできるわけじゃないし』

・ ・ ・ ・ ・

「も、もうやめなさいよ!」

あのロングちゃん、一度は逃げようとしたのに戻ってスキルアウト
にあんな事を言うなんて!

偉いぞ! ロングちゃん!

ガン!!

「ひっ」

スキルアウトの1人がロングちゃんに当たるか当たらないか、スレ
スレの蹴りを壁に入れる。

「あ、あ……」

怯えるロングちゃんの髪を掴む。

「ガキが生意気言うじゃねーか

何の力もねえ、非力な奴にゴチャゴチャ指図する権利はねーんだよ」

「待て」

流石にキレたわゝ

「ああ？ 何だテメエ？」

「ジャッジメントDEATH NO！ とか言いたいのが、まあ通りすがりの人探しですよ」

「ハッ！ 何かと思えばガキが一匹増えただけじゃねえか」

ガキって……

まあコイツらから見たら俺はガキか？

「いたいけな少女に手を出すなんてお前らは人間じゃねえ」

そう言い、目の前のスキルアウトの顎へ拳を一瞬霞む程の速さで振り抜く。

「がっ!？」

強化してたからコレで気絶するだろ。

「さあ、コイツみたいになんたくなかったらアンチスキルに捕まれ抵抗するならブチのめす」

「言ってくれるな」

もう1人のスキルアウトが近くの鉄柱などを浮かす。

念動力か？

「どうやら能力者のようだが、俺達に立てついた事、後悔させてやるぜっ！」

鉄柱がコチラに向かって来る。

「危な…！」

ロングちゃんが声を上げるが俺は微動だにしない。

ジュウウウウウウウ…！！！！！！！！

何故なら、俺に当たる前に蒸発するから。

熱の壁…！！

名前は……ファイバーウォール？

……ヒートウォール

うん、ファイヤーウォールにしようか
火は出ないけど

「なっ!?!」

「ま、残念だったな」

すぐさまもう一人に近づき、今度は顎を下から打ち抜く。

そのまま浮き上がり俺の後ろに落ちる。

ゴシヤッ! って頭から落ちたけど大丈夫かな……

「よし、と。」

さ、最後だお縄につきなさいよ」

「カカカカカカ!

おもしれー能力だな

何の能力だ?」

「……………第四波動」

「ああ? 第四波動?

あー、どっかで聞いたような?」

アイツが何か考えている隙に地面の熱を足から吸収する。

ピシピシ……ビキビキビキ!!

足下から地面が凍って行く。

「な、凍って……?」

「聞いた事あるんじゃないか?

俺は公式的に名前が乗ってるしな。
学園都市 第八位 第四波動ってな！」

【第四波動!!】

奴に向かって炎を放出する。

殺したら大変だから見た目を派手に、実質温度は720℃程度にして撃つ。

奴がいた場所に着弾する。

「す、凄い……」

ロングちゃんが驚いている。

凄いだなんて、テンション上がるじゃないか！

そして着弾した場所から煙がはれる。

「……あれ？」

奴がいねえ、え？嘘？720℃で吹っ飛んだの？

「あ、う、後ろ!!」

「え？うおう!？」

ロングちゃんの声で後ろからの蹴りをとっさにガードする。

「はあ？　いつの間に後ろに……」

「カカカカカカ！！
なるほどなあ、どっかで聞いた事あると思ったらレベル5か……」

「おお、そうだよ、ほらレベル5は恐ろしいだろ？
さっさと降参しろ！」

奴に跳び蹴りを放つ、が当たらない。

やっぱ、能力か？

「カカカ！！
降参なんてしねえよ
第八位なんて、俺達でも十分倒せるレベルだろ？」

何か悲しくなってきた。
だが同時にキレちゃった☆

「第八位だから倒せる？
レベル5舐めんな！！」

【ストリームディストーション！！】

熱で小型台風を作り出し鉄柱など色々巻き込む

「な、何い！？
風だとお！？」

「あんたがどんな能力か知らんが……
潰れろやあ!!」

相手の上空にまで移動した風がやみ、鉄柱などが一斉に落ちる。

「ダメ押し!!」

【第四波動!!】

鉄柱が落ちてる中に第四波動を撃ち込む。

ちなみにそのせいで背後のビル崩壊。

「うああああ!!!!!!」

相手の悲鳴が聞こえた。

……あれ?

ヤバくね?

………うん、大丈夫だろう!

俺は考えるのを止めた。

さて、ロングちゃんの所に行くか。

「やあ、大丈夫か?」

「あ、は、はい！」

ありがとうございます」

「ああ、そっちのあんたも」

「う、うん」

そういや、いた事をわすれてた。
ごめん。

「ま、無事ならよかったよ、それじゃ、俺はアンチスキルが来る前に行……」

「ジャッジメントですわ」

「……………」

「……………」

……………。

「いやあああ！？
出たあ！？」

「だから失礼ですわね！？
というかまたアナタですの？」

まさかパンダ子が来るとは……

「いや、この子が襲われてたから……」

「大丈夫ですか？ 佐天さん」

なん・・・だと？

「さてん・・・？」

「え？ あ、はい、私、佐天 涙子っています。」

マジで？

「ああ、そういえばアナタも、さてんでしたわね」

「え？」

佐天さんが驚く。

「まさか、さてんていう名前の人がいたとは……
どうも、左天です。」

漢字は【左】に【天】で左天だ。
ちなみに偽名です。」

「え？ 本名は？」

「この方、何度言っても本名を言わないんですの」

はあ、とパンダ子が溜め息をつく。

「学園都市じゃ本名よりこっちのが本名みたいになってんだよ。
まあ、だから学園都市内じゃ左天は本名だ！」

「たった今偽名と言いましたのに……」

うるさい！

「あ、あはは……」

あ、そうだ！ し、白井さん！ あたし、用事があるんでコレで！」

「え？ ちょっと、佐天さん！？」

何だ？

あの子慌てて走って行ったが……と思っただけ止まった。

「あ、あの左天さん！」

どうもありがとうございます！

今度お礼させてください！」

と言い、走り去って行った。

返事する暇がなかったよ……

「どうしたんでしょう？」

「よう、分からんが……」

まあいいや、俺も行くわ。」

そうして上条さん探しをしようと歩きだそうとした瞬間

「お待ちなさい」

止められました。

「あなた、喫茶店で木山先生の下着を盗撮しましたわね？」

タラリと汗が噴き出す。

「盗撮じゃないぜ、撮影だ！」

「屁理屈言うんじゃないやありません！」

「屁理屈だって理屈だ！」

残念だが俺は逃げるぜい！

「あ、御坂！」

「え？ お姉さま！？」

さもそこにいるかのように声を出し、そしてそれに騙された白井から全力で逃げ出した。

「どこにもいないでは……………逃げられましたわ！？」

特別編一とある左天の日常風景一（前書き）

次話から三沢塾編。

てか、感想で左天のヒロインは誰か、と言うのがあったんだけど、全く決めてないという。

誰にしよう……

あれでしょ？

上条で言う、インデックス

一方通行で言う、打ち止めの位置の方になるわけだよね？

誰かいるかねえ？

特別編一とある左天の日常風景一

く左天のある一日の風景く

ピピピピピ!

枕元の時計が鳴る。

「・・・んん?」

左天はもぞもぞと布団から腕を出し、時計を止めようとする。

が、時計が見当たらない。

「んん、ん?

んん? ふん!」

メキヤツ!

少し苛立ち、思い切り腕を振り下ろしたら妙な音がした。

「あ」

その妙な音で完全に目が覚めた。

「あゝあ……」

壊れた？

……まあいいや、まだ携帯のアラームが残っている」

そんな事を言いながら、布団から出て、洗面所に向かい歯を磨く。

シャカシャカシャカシャカ・・・↑歯磨く音

ガラガラガラガラガラ・・・↑口をゆすぐ音

ダー・・・↑口から水を出す音

そして顔を洗い。

朝食を食べるためにキッチンへ行く。

・
・
・
・
・
・

あゝ、何かないかね？

俺、料理出来ないけど、別に料理したら未^{ターク}元物質が出来ちゃう訳じゃないよ？

目玉焼きとか、簡単なのは出来る。

……………卵がねえ

「もうカップ麺でいいや」

そう言い、鍋に水を入れる。

スッ、ピト↑鍋の底に手を沿える。

コポ、コポ、ゴボゴボゴボ!!↑沸いた。

お湯をカップに注いで3分待ち、食べ始めた。

あゝ、今日何しよう？

上条の所に行こうかな？

俺、レベル0になっちゃった☆キラッって。

いやあゝ、上条さんが記憶なくした次の日に何か知らんが俺レベル0になってたんだよなあゝ

第八位でもなくなったし。

何で？　とか思っただけで能力を検査しにいったらレベル0って判定だったしなあ

意味が分からん。

普通に第四波動が扱えるのにな。

まあレベル5なんてお金が沢山貰えるってだけであとは別になんもないしな。

しかも何かよう分からん連中から喧嘩売られる事もないだろうし！

逆にレベル0になって嬉しいかもね！

俺の第四波動も上条の幻想殺しみたいに無能力だけど能力を持って
るみたいな感じになったか……

まあいいや、とりあえず朝食も食ったし、外に出て当てもなくさま
よつていよう。

・
・
・
・
・
・

（公園）

当てもなくさまようとか言っておきながら、公園のベンチに座りボ
ーっとしている今日この頃。

………能力の練習でもするか。

・
・
・
・
・

「ヒート！ ジョーカー！」

とか言いながら、あついパーンチ（仮）を繰り出しています。

正直に言おう、端からみたら痛い人であると！

ママー、あの人

シッ、見ちゃいけません！

とか聞こえた気がする。

気のせいだと信じたい。

……………うん、さて、新技開発しよう。

パッと思いついたのをためすかな。

まず自販機でミネラルウォーターを買います。

そして蓋を開けてペットボトルを逆さまにします。

水がでます。

水が出てる時に熱吸収で一瞬で凍らせます。

完成。

スパゲティを頼んだはずなのに何故だ。

……………まあ上手いからいいや

何か限定のパフェっぽいし、たまにはデザートのみで腹を満たすのもいいかもねえ

しかし、カロリーの摂取量が半端ねえ

俺の能力がドッペルゲンガーとかならカロリーとか気にしないがな

しかし、デロドロンドリンクってどんな味すんだろ？

などと、どうでもいいことを考えていたら

「結局、私のパフェが来ない訳よ」

って声が聞こえて来た。

そこに視線を向けると

何か女性4人組がいましたよ。

へーい、彼女達とか声をかけてみようかと思いましたが、その中の一人が桁違いな気がするのでやめました、はい。

「ホント、超遅いですね」

「店員が忘れてるんじゃない？」

「うう」

「大丈夫、私はそんなフレンダを応援してる」

「パフェが来ないのを応援されても意味ない訳よ！」

……………なかなか個性的な方々ですね。

あと、多分だが俺が食べてるパフェはきっとあなたのですね。

ごめん、もう7割がた食べてる。

どうでもいいが変ないちゃもんつけて来ないよね？

大丈夫、俺は逃げ足には定評がある！

……………なんだろう、涙がでるよ、お母さん……

「この子のパフェがまだ来ないんだけど？」

あ、店員さん呼んだっばいな。

「申し訳ございません！」

「すぐに持ってきて欲しい訳よ！」

「それが……申し上げにくいのですが、丁度材料が切れてしまい、今日はもう作ることができないんです。」

「ぶっ！ おふ、ゴホッゴホ！」

いかん吹いてしまった！

やべえ、あの子ちよつと上条さん並みに不幸じゃないか……

「何かあの人、超笑ってますけど」

あの人って俺じゃないよね？ 俺じゃ……ガン見だよ。

「あのお客様に運んだパフェが最後のパフェだったんです」

店員さんが超余計な事を言いおった……

しかも俺ので終わったとかもうホントごめん。

今更注文したのと違うとか言ったら爆殺されそうな気がする。

ま、爆発は巨大な熱だから吸収して終わりだけだね！

「男なのにパフェ食るとか意味わかんないけど！」

食べたくて食べてる訳じゃないんだがねえ」

あとそれは偏見だ。

もう、帰るか……

「お客様、大変お待たせしました」

……………スパゲティイイイイイ！！！！！！！！！！

今更！？

そして店員が伝票を見る。

そして――

「あの、お客様、パフェは注文なさいましたか？」

そんな事を、言ったんだ――

「ふ、ふふ、いや、注文してないです、間違いで来たんですがもういいやと食っちゃいましたハッハッハッハッハッ！」

大丈夫、パフェ分も払いますから今はもう私を帰してください」

俺を見る視線に明らかな殺気があるからあああ！！

「金はここに置いとくんで！」

さらばだ！」

俺は全力で逃走した。

・ ・ ・ ・ ・

逃走中！

まあ追いかけては来ないだろうが念のため複雑な逃走経路で逃げて来たよ

「ふう、ここまで来ればいいだろ。

こちら辺、人が誰もいないから追いかけて来てたら大変なことになるけど、大丈夫だr」

「み〜つけた！」

俺は死んだ。

いや、冗談じゃないぜ！

きっとあれだ、偶々かくれんぼしてた子供達だよ！

だから安心して振り向けば……

「結局あたしからは逃げられない訳よ！」

今、俺絶対理不尽な怒りをぶつけられてるよね。
何で？ 俺パフェ食べてただけじゃん。

まさかの不幸は俺だった！

何を言っているかわからね（ry

「何故追いかけてくるのよ？」

「結局、八つ当たりするためよ！」

理不尽だ！ 凄い理不尽だ！

「何で私達まで……
超面倒くさいです。」

「あたしらは見てるから勝手にやってなさい」

「大丈夫、私はフレンダを応援してる」

いや、止めろよ！？

応援すんなよ！？

「オイオイオイ……
こっちは無能力者だぞ？」

公式的にはね！

「自分の不運を恨むがいい訳よ！」

ああ、今なら俺、第五波動が撃てそうだ。

「確かに、多分あんたのだったパフェを食べた事は謝るでもあれは店員の運び間違いが悪いだろ？」

「結局、あたしのパフェを食べたあんたが悪い訳よ！」

もう何を言っても無駄か……
しょうがない……

「いいぜ、お前が店員の運び間違いが悪いのを俺のせいにするってんなら、まずは、そのふざけた幻想を焼き殺す！」

ハイパーまるパクリタイム！

俺は周囲の熱を急激に吸収する。

すぐさま辺りが寒くなり地面や壁が凍りついて行く。

「なっ！？ これは……」

「さあ、覚悟しろよ……」

「無能力者じゃないの！？」

「いや、無能力者だよ？ クク、覚悟しろ」

まあつい最近まで第八位だったけどな

俺は携帯を取り出し、カメラモードにする。

「行くぞ！」

俺は謎のポーズを決め

そして

「そよ風爆風拳!!」

熱で風を起こし相手のスカートをめくり上げた。

「え？」

「今だ!!」

パシャパシャパシャパシャ!!!!!!

説明しよう!

そよ風爆風拳とは

謎のポーズを決めてから、腕を振るうことで、風速百キロの風を発生させる。ただし対象者の周囲の風はそよ風となっていて安全。あくまでもスカートめくり用の技といった感じである。

言っただろう?

ハイパーまるパクリタイムと!

相手は慌ててスカートを抑える。

「な……な……!!」

「ハァーハッハッハッハ!!」

油断したな!

さらばだっ!!」

俺は、今度は熱エネルギーで身体能力を極限まで高め逃走した。

・
・
・
・
・
・

「う、うう!!」

た、滝壺!!」

「ごめん、いきなり過ぎてAIM拡散力場を記憶できなかった」

顔を赤く染め地団駄を踏む。

「悔しい!! あいつ、絶対に殺す!!」

「大丈夫、私はそんなフレンダを応援してる」

そんな中、二人だけ黙り、考えている。

「麦野、今の人」

「ええ、無能力者とか言いながら、能力を氷と風、2つ使ってたわね」

「何者なんでしょうか？
超気になります。」

「さあね、でも、また近いうちに会いそうね……」

・ ・ ・ ・ ・

ふう、逃げ切れたか……
もう会いたくないわ
色んな意味で。

てか俺の携帯……

こないだの木山先生の下着にさっきの子の下着、何か余裕で捕まり
そうな……

いや、だって木山先生のはさ、あれ自分で脱いでたしさあ！？

さっきのは……そう！偶々風がふいただけだよ！

………もういい、何か虚しい、今日はもう帰る……

はあ、上条じゃないが言っておくか……

「あゝ不幸だ……」

いや、まあ最後の最後は幸福だったとも……

いや、後々のリスクを考えるとやっぱり不幸だ……

第九話 三沢塾一（前書き）

左天のヒロインはフレンダ……

なるほど、

フレ

ンダ

になる前に救わなきゃいけないな・・・

第九話 二三沢塾一

（公園）

そう、今ここにあの人がいた！

「……………」ぼー

その男、左天は公園のベンチに座りぼーっと考え事をしていた。

「無音脱がし術、か……」

左天は自分の掌をぐっばぐっば閉じたり開いたりする。

「無音か、身体能力強化で出せるかどうか……」

いや、脚力だけを極限に強化すれば、いやしかし、速いだけでは……」

と、ブツブツ呟いている。

もはや完全に痛い奴である。

「こないな場所で何やっとなるんや？ さっちゃん」

「端から見たらスゲー痛い奴だったぜい？」

そんな中、左天に声をかける二人の人物が！

「ん？　おう、青ピにツツチーじゃないか」

その二人の人物の名は金髪グラサンアロハシャツの方が【土御門元春】

シスコンである。

そして、もう一人の青髪でピアスで世界3大テノールも驚く野太い声の方が【青髪　ピアス】

何かもう色々と尊敬できる人物。

他人の出来ないことを平然とやってのける。

しかしそこに痺れもしなければ憧れもしない。

「何やってんだにゃー？」

「いやあ、新技を考えてたら、いつの間にかパクリ技を考えてた」

「なんやそれ……」

何を言ってるか（ry

「そーいや聞いたぜい

さっちゃん、レベル0になったんだって？」

土御門が左天に聞く。

「おう、よく知ってるな。

その通り、私、左天はレベル0になりました、何故か」

「はあゝ、ホンマやったんか、じゃ、コレで『僕があの学校唯一のレベル5やで』って偽ってモテる作戦とか」

「夏場に涼しくして貰ったり、冬場に暖かくして貰ったり出来なくなっただけよ」

プチッと左天から何かが切れる音が聞こえた。

【第四波動】

「「おおおおお!?!」」

二人に向けて第四波動がノーアクションで放たれる。

しかし、二人は間一髪避けきった。

「お前らが! 泣くまで! 撃つのを止めない!」

【第四波動（連続小出し）】

「冗談やあああ!?!」

「てか何で能力が使えるんだにやあああ!?!」

「クハハハハハ!?!」

・
・
・
・

『少々お待ちください。』ピンポンパンポーン♪・

・ ・ ・
「――と言うわけで、レベル0になっても能力は使えるんだよね」

「そ、そうなんや」

言わずもがな二人はボロボロであった。

実は俺も今一瞬の記憶がなくて……

「んじゃ力はレベル5のままでもレベル0だから
奨学金がスッゴい下がってるんじゃないのかにゃー？」

確かにそうだがな……

「馬鹿め！」

人は金のみで生きるものではない！
例えば彼女とか、お姉様とか……
あと特に妹とか！！」

そう言うと土御門が突然俺の手を握り

「分かる、それ凄く分かるぜよ！」

おおふ、セリフ引用だったんだがな……

「うん、分かったか落ち着け」

・

・ ・ ・ ・ ・

それから、俺たち三人はブラブラと話ながら街を歩いていた。

すると前方に上条とインデックスがいるのを発見。
何かアイスをねだられてるっぽいな。

「おひょー！」

青髪の声で二人が此方に気づく。

「なかなか素敵なお話中なんやけどな、カミヤん」

「ちなみにその子、誰ぜよ？」

「……は？」

上条が誰だコイツみたいな顔をしている。

ああ、記憶喪失だったな……

「どしたん？ ポケーっとして？」

暑さにやられて記憶でも飛んどんのかいな？」

「え！？」

「んもー、冗談やがな！」

記憶喪失なんて、不思議系電波少女の特権やがなあ」

と、青髪がクネクネ動く。

「お前は何を言っただ。

あと、クネクネ動くな！」

「で？ 実際誰ぜよ？

そのちっこいの」

インペリアルドラモンさんです。

はい、すいません、調子に乗りました。

「あ、もしかして、女装少年？

女の子にしてはペッタンコ過ぎるし」

それ何てブリジット

てかインデックスがキレてる、超プルプルしてる。

「な！？ お前ら言っていることと悪い事が！

いくら幼児体型だからって」

「あ、トドメ……」

インデックスが完全にキレた。

「とおま……」

「い!?!」

「私はイギリス正教に属する修道女です。

悔いがあるなら今の内に聞いて上げてもいいんだよ、とおまああ!」

キレすぎて逆に神々しい……

後光がさしてるぜ。

・
・
・
・
・

と、言うわけでインデックスのご機嫌取りにアイスをあげようと、店にいったら休みだった。

「~~~~~!?!?!」

ヤベェ超キレてる!

結局、マクドナルドに行き、シェイクを3つ買って上げた。

「悪いにゃー、カミヤん!」

「ゴチになりまーす!」

この二人のも買った。

勿論上条さんが。

俺は何か上条が不憫だったから自分で購入。

「何で俺があいつらの分まで……」

「まあ、何だドンマイ！

あ、あとあの二人だが……」

俺は上条に二人の事がある程度説明する。

「はあ、まさか俺にあんな悪友がいたとは……」
はい、不幸いただきましたー。

「とうまー！ こっちだよー！」

インデックスが手を振る。

そして、その場所には……

「ん？ 何だあれは？」

インデックスのいるテーブルに……

何か、顔をうつ伏せとる巫女さんがおるけど？

上条もかなり怪しんでるな……

「シスターもだが、巫女スゲー浮くな……」

「ううん……」

巫女さんが呻く。

「ど、どうかした？」

上条が意を決して声をかけてみる。

「く……」

「く？どこか苦しいの？」

「食い倒れた……」

シーン……

うわぁ、マジかよ……

「……何故ゆえ食い倒れに……？」

「ナイス！ さっちゃん！」

何がだ？ 理由を聞いた事か？

「500円のハンバーガー」

「おお」

「お徳用のクーポンが沢山あったから」

「うん」

「とりあえず。30個程頼んでみたり」

「ええ」

あんた馬鹿だろう……？」

いや、ガン！ってなられても……

「……帰りの電車賃。600円」

「は？」

「全財産。500円」

「……それで？」

「買いすぎ。無計画」

……。

「だから。やけ食い」

「……………」

ヤベエどうしよう、何て言えばいいんだ……

そんなやりとりを見て上条が口を挟む。

「そもそも、それ以前に電車賃くらい誰かに借りられないのか？」

上条の言葉で巫女さんが顔を上げた。

「それはいい案」

普通に美人な件について。

「おおー！」

「別嬪さんだぜい！」

青髪が携帯を取り出し写メる。

そして、巫女さんは……

ジーっと上条を見つめる。

「な、何故、こっちをみる？」

てか期待の眼差し向けるんじゃないやねえ！」

「100円。無理？」

もう、何なのこの子……

「え？ 無理！ 貸せない物は貸せない！」

「チッ。たかが100円も貸せない何て」

「たかが100円持ってねえのはどこの馬鹿だオイ！」

上条がキレる。

「こおんな、美人の巫女さんを前にしてその言葉、成長したにゃー、カミちゃん!」

土御門の言葉に何故かインデックスがキレ気味に、そして巫女さんが美人と言う単語に反応する。

「美人に免じてあと100円」

おい。

しかし上条は断る。

そして次に土御門に

「100円」

「にゃあああ!? こっち来た!」

青髪にも……

「100円!」

「うわあ!? 何でこっちにも!?」

「写真撮られた」

「ちよっ!? 有料って……」

そして勿論、俺にも……

「100円!」

「何でキレ気味なんだよ!?!?」
「いいよ、1000円くらい……」

俺は財布を取り出し中を見る。

あ……

「丁度1000円が無え……」

「じゃ。1000円」

「何で桁増えてんだよ!?!?」

と、ここまで来て、インデックスがキレた。

「へ、へえ、この街の巫女さんってこんなにがめついんだ」

何でキレてんだろ?
シスターだからかな?

「私。巫女さんではない」

「はあ? どっから見たって完璧な巫女さんだろ?」

上条が言うが……

「私。魔法使い」

バン!

インデックスがテーブルを叩く。

「魔法使いい？ 魔法使いって何！？」

曖昧な事言っていないで、専門と、学派と、魔法名と、オーダー名を名乗るんだよ！ おバカ！」

ちよ、インデックスさん？

「？」

ほら、魔法使い（笑）も何か分かってないし！

「だいたい、そんな格好するんだったら、せめて童謡系の先占術師くらいのホラを吹かなきゃダメなんだよ！」

「ふーん。じゃ。それ」

キイイイ！とインデックスが歯を食いしばる

ハンカチ渡してみようかしら……

そんなインデックスを上条がなだめる。

いや、ていうかさあ、何か俺らの後ろにいつの間にかスーツのオッサン達が立ってるんだけど……

「？ 誰ぜよ、このおっちゃん達……」

「いつの間に……」

すると、魔法使い（笑）が立ち上がり

「あと100円」

と言った。

「この人達、お前の知り合いなのか？」

上条が聞く。

「うん。塾の先生」

塾の先生、ね。

塾の先生にしちゃ何か薄気味悪いな……

そうして、魔法巫女さんは先生たちに連れられて行った。

名前とか聞いたときやよかったかもな。

………トモエ、とかじゃないよな？

声とか巫女服的に。

「けど、何で塾の先生が生徒の面倒見んねんな」
青髪が呟く。

うーん。

何か気になる。

………よし！

「みんな、悪い！
用事思い出したから行くわ！」

そう言い、俺はマクドナルドを出た。

・
・
・
・
・
・

さて……

あの武者巫女をさり気なく追ってきてみたけど……

塾ってここかよ……

三沢塾……

学園都市で一番デカいんじゃないか？

ここに入って行っただから間違いないはず。

よし、ちよいと入ってみるかな！

・
・
・
・
・

「……………これは」

一言で言うなら異質。

ロビーには生徒が結構いるのにただの一人すら、こっちを見なかった。

俺が認識出来ないみたいに。

いや、実際出来ないのか？

俺はそのまま周囲を見渡す。

すると、視界の端に妙なモノを発見した。

それに近づいて見る。

「これって……」

ソレは騎士甲冑を着込んだ人間だった。

床に大量の血を流し、死んでいる。

やっぱり……ここ、何かあるな……

生徒は誰もこの騎士に気づいていない。

普通大騒ぎになるってのに……

俺は騎士に手を合わせ、階段を上り散策を始めた。

第十話 一姫神 秋沙一（前書き）

ちなみにだが、左天が第四波動を使うとき毎回

【第四波動!!】ってなってるけど、これはニードレスで言うデカ文字で技名を表示と同じ意味なのですよー

左天が自分で言ってる訳じゃないです。

自分で言ったりもするけど

第十話 一姫神 秋沙一

……怖いよおお！ お母さああああん！！！！

「誰も反応してくれねえ！！！」

いや、分かってたけどね？

本当にみんな反応しないわ

触ろうとしたら弾かれたし……

結論。

これ魔術か？

こんな事できるのとか魔術くらいじゃね？

いや、超能力を全て把握してる訳じゃないから分からないんだが……

ていうか、通路なんかが薄暗いからめっちゃ不気味

魔術絡みならまたインデックス関係か？

じゃあステイルとか神裂がまた来てるのか？

何かよう分からん……

とりあえず、あの巫女さんを探してみるかな。

・ ・ ・ ・ ・

食堂に来た。

勿論誰も俺に気づかない。

そういやマックで結局食えてないから、腹が減ったな……

まあ、何か取ろうとしても、弾かれて終わりだな！

まあいい、次に行くか。・

・ ・ ・ ・ ・

教室に来た。

そうか、塾だと忘れてたわ。

教室とかはあるわな。

ここにもまばらに生徒はいるが……

巫女さんはいない。

………てか、塾を此処までデカくする必要あんの？

・ ・ ・ ・ ・

〔三沢塾・上条、ステイルサイド〕

左天が三沢塾を調べ始めて数十分後に新たに二人が侵入した。

上条当麻は再び会った（と、言っても覚えていないが）魔術師ステイルと三沢塾に監禁されているという女性【姫神 秋沙】を錬金術師アウレオルス・イザードから救うべく三沢塾に侵入していた。

騎士の死体を見て驚きはしたが、ステイルと一緒に三沢塾ないを歩く。

ちなみに生徒達が上条達を認識できないのは結界のせいである。

コインで言えば生徒達は“表側”上条達は“裏側”の存在だから。

そして、食堂の入り口で立ち止まった。

「ふーん、科学宗教ってのは初めてだけど、至って普通だね」
ステイルが口を開く。

「てっきり教祖様の顔写真でも飾ってあるのかと思ったよ」

「確かに、危険度は低そうだけど……っ!？」

上条がそれに答えた瞬間、今まで上条達の存在を認識できずにいた
“表側”の生徒達が“裏側”の上条達の方を一斉に見る。

「……………まずいかな」

「は？ え？」

「呆けるなよ、コインの表の住人にコインの裏の僕らが見えるはず
がない」

そして、こちらを見ていた生徒の一人が口を開く。

「始点の翼は輝く光」

その生徒から別の生徒へ呪文のような何かが詠唱されていく。

「輝く光は罪を暴く純白」

「純白は浄化の証」

「証は行動の結果」

『結果は未来』

『未来は時間』

「自動の警報か……」

生徒達の言葉を聞き、ステイルが冷や汗を垂らしながら呟く。

「はぁ？」

「本来、コインの表にいる生徒達をコインの裏に立たせているんだろう」

そう言っている最中も生徒達の言葉は続く。

そして、徐々に生徒達から光球が現れる。

「ほうら、イマジンブレイカー、君の順番だ！」

そう言い、上条を残しステイルは一人逃げる。

「お、おい！！」

「ったく！」

生徒たちに視線を戻すが、生徒達はみな席から立って上条を見つめている。

そして光球が一斉に放たれた。

「い!？」

上条はそれを見た瞬間すぐさま逃亡。

ステイルに追いつく。

「お、おい! 逃げるな!

その右手は竜の殺息のドラゴンブレス一撃にだって耐えたんだぞ!
なのに無防備な背中を見せる何てどうかしてるぞ!」

「人を盾にしといてよく言うぜ!
量が絶望的だ、あんなもん右手一つで対処できるか!」

二人は必死で逃げる。

・
・
・
・
・
・

「おおおおお!!!」

なんじゃなんじゃなんじゃああ!？」

え? 何? 何でいきなり生徒達に攻撃されてんだよ俺!

いきなり生徒達が変な言葉を言い出したと思ったら……

ヤバイ、死ぬ!

俺が必死に逃げていると、T字路になっている廊下の右側から人の走る音と、声が聞こえて来た。
あれ？ コレって……

「っ！？ 左天！」

「ぬおっ！？ 上条！」

あとステイル！」

お前らもいたのか、と二人と合流して一緒に逃げる。

「君も来ていたのか！」

「何か巫女さんが気になって来てみたらくうだよ！！！
てか、お前がいるってことはやっぱり魔術絡みか！？」

そう言いながら、走る。

そして階段を下りた所でステイルが言う、偽・グレゴリオの聖歌隊
というのに殆ど囲まれる。

「……一つ秘策があると言えばあるんだけど……」

「あるんならさっさと使え！」

ステイルの言葉に上条が怒鳴る。

「そうかい！」

そう言いステイルは上条と俺を階段へと突き飛ばす。

「うお、と！ わ、とと！？」

何とか階段で転倒せずに降りる。

「デメエ！ 何しやがる！？」

そして、ステイルはバッドラック☆とか言いながら走り去って言った。

ああ、あいつ殴らないとな……

とりあえず、俺と上条は逃げる。

そして、階段を降りきった所に一人の女生徒がいた。

「罪を罰するは炎
炎を司るは煉獄」

その女生徒もさっきの奴らと同じく言葉を紡ぐ。
だが、言葉を紡ぐ女生徒の顔に傷が走り血が出る。

「暴力は死の工程
工程は認識」

そんな事を全く気にする様子もなく、女生徒は無表情に淡々と言葉を発する。

「止めろ！ 自分の体がヤバくなってる事くらい分かるだろ！！」

上条の言葉にもやはり反応を示さず、言葉を発し続ける、が。

パン！ と女生徒から出て来かけていた光球が弾け、女生徒がそのまま倒れる。

「うおっと！」

倒れる女生徒を支え地面に下ろす。

「な、なんだ？」

上条が偽・グレゴリオの聖歌隊を見ながら言う。
光球が一ヶ所にまとまり、俺達に迫って来た。

そして来るであろう痛みに備え身構えた。

「？」

しかし、痛みは一向にこず、辺りを見回すと俺達の周囲に光球が止まっていた。

そして、そのまま床へと落ち、溶けるように消えていった。

「これは、一体……」

カッ！ と背後から音がした。

「！ お前は！」

そこにはあの時の謎の魔法巫女さん、姫神が立っていた。

・

・ ・ ・ ・ ・

「とりあえず。おしまい」

再開した姫神に女生徒の傷を見てもらい応急処置をしてもらった。

「てか、お前すげー腕だな……」

もしかして無免許の名医さん、とか？」

それなんてブラックジャック

「医者じゃない。私。魔法使い」

「えっと、どの辺か魔法使い？」

「それなら持ってる」

姫神が胸に手を入れる。

おおお！ お胸様があああ！！

上条は赤くなり目をそらす。

もったいない……

そして、姫神が取り出したのは……

「これ。魔法のステッキ」

それは、ビリビリと青白い電気を出している

「つて、警棒じゃねえか！」

「新素材」

「ふざけんな！」

いや待てよ？

電撃の出る警棒を持つ魔法巫女……

これは、売れる！

「あ、そうだ、救急車よばねえと」

「それはいい」

えっとどっちの意味で？

「何、他人事みたいに言ってるんだ、お前も行くんだぞ」

あ、そっちの意味か。

上条のその言葉を聞き、姫神の顔が険しくなる。

「私にも目的がある。ここから抜け出す事ではなく。ここでなければ出来ない目的……」

違う。錬金術師がいなければ出来ない目的というのが正解」

「けど、仲間だったら監禁してたて籠もったりしねーだろ？」

「それはアウレオルスに乗っ取られる前。

私が外に出ないのは必要性を感じないだけ。不用意に出ればアレを呼び寄せるから」

……アレって吸血鬼の事か？

ステイルが言ってたが本当にいるのか……

それから姫神の話を聞く。

吸血鬼とはどんなものか、あの時何故外にいたのかなど

アウレオルスという錬金術師は助きたい人がいて、それには吸血鬼の力が必要だと、だから姫神の能力を使っているのか。

理由はどうあれ姫神はアウレオルスを信じ、此処にいるって事か……

「だから約束した。殺す為でなく。助ける為にこの力を使うって」

姫神の話を聞き、上条が口を開く。

「そんなの駄目だ。

もしそいつがお前の言うとおりの人間だとしたら、これ以上間違えさせる事なんてできない。

このまま済ませちゃったら、本当に取り返しのつかない事になっちゃう」

上条がそう言った次の瞬間に廊下の奥から足音が響く。

「必然。私のどこが取り返しのない事と語るか？」

「……あいつが」

「完全。子細ない、すぐそちらへ向かおう」

そう言った瞬間、奴は俺達の目の前にいた。

「!？」

「当然。疑問はわいて出るだろうが答える義務なし」

上条が殴りかかるが……

「これ以上、貴様は此方へ来るな」

その言葉で上条が止まる。

本当に進めないようだ。

「どういう事だ？」

「無然。つまらんな少年」

そしてアウレオルスが上条へ何かを言おうとする。

【第四波動!?!】

それを止める為に第四波動を放つ。

「嘩然。私にこのようなモノは意味をなさぬ、消えろ」

瞬間、第四波動が霧散する。

「なっ!？」

「ふっ、やはりつまらんな、吹きと「待って!」

姫神が俺達の間にはいる。

「姫神! 馬鹿野郎!」

アウレオルスがふん、と笑う。

「必然。こんな所で時間をさく余裕もなし」

また、何かをやるのかと身構える。

「少年ら、案ずるな殺しはしない」

そう言うと、アウレオルスはポケットから長い針を取り出し、自分の首へ刺した。

そして――

「ここで起きた事は全て忘れろ!」

――
――
――
――
――
――

「あん? あれ、ここは……公園?」

「君達がいるって事は日本には違いないな……」
近くにはステイルと上条もいた。

あれ？ 何してんだ、俺達……？

第十一話 黄金鍊成一（前書き）

最後の方眠くて若干わけわからんようになってるかもしれん……

第十一話 黄金鍊成

「な〜んか、忘れてる気がするんだが？」

こう、もやもやと……何だろうな？

「確かに、何だっけ？」

「ま、思い出す必要もない程度の事なんだろうさ」

ステイルがタバコに火をつけ言う。

「そう、なのかな……」

上条が頭を“右手”でかく
その時、上条が目を見開く。

「ん？ どうした？ 上条？」

座っていた上条が立ち上がり俺の頭に右手を置く。

「お！？ あ……ああ！！」

思い出した！」

そうだよ！ 俺達は三沢塾に姫神を救出しに来てたんだよ！

完全に忘れてるとは……

あの鍊金術師、何をした？

「？ 君達、二人してどうしたんだい？」

「お前の疑問をさっくり解消させる
おまじないを教えてやる。」

「うん？ 東洋の呪い^{まじな}は神裂の専門なんだ、彼女に聞くよ」

「いいから、目を瞑って舌を出せ」

ステイルは全く意味が分からないといった表情で上条を見る。

「べーって、出してみろよ」

それでもステイルは渋々といった感じで舌を出す。

そして、その瞬間上条がステイルへと近づき

「よくも人様を囷に使って逃げ延びやがったな記念！」

そういい、ステイルの顎を下から殴り上げた。

うわぁ、痛そうだな

あれ下手したら舌切れるよな……

……あ

「俺も便乗！！」

ズドム！

「うっ！

き、君達……な……」

ご臨終です。

・ ・ ・ ・ ・

俺達は急いで三沢塾へと戻る。

すると

「おい、あいつら、入り口にいた……」

入り口にいた騎士甲冑を来た死人と同じ、甲冑を来た奴らが入り口に集まっている。

「十三騎士団の生き残りか……」

ステイルが呟く、そして、騎士達が剣を抜き

「攻撃を開始する!!」

そう、高らかと言った。

「攻撃？ あいつら何する気だ？」

瞬間。

奴らの持つ剣の先が発光する。

グレゴリオ・クアイア
「真・聖歌隊……」

「は？」

「正真正銘のグレゴリオの聖歌隊だよ」

マジか……

偽物を見たその日に本物を見ることになるとは……

「ん？ だけどグレゴリオの聖歌隊ってのはかなりの人数が必要とか言ってなかったか？」

「今頃、バチカン大聖堂では3333人の信徒が祈りを捧げてるんだろうさ」

『ヨハネ黙示録 第八章 第七節より抜粋！

第一の御使い、その手に持つ滅びの管楽器の音を此処に再現せよ！』

発光が一層強まり辺りを照らす。

「おい！ アイツら何する気だ！？」

「聖呪爆撃……！！！」

「っ！？ 爆撃！？

中にはまだ姫神や生徒達が……！！！」

空に雷雲のような物が現れ、そこから雷のようなものが三沢塾へと落とされる。

偽物とか比べ物にならないくらい威力高いじゃねーか！

「!？」

「崩れるぞ!!」

三沢塾が倒壊していく、割れた硝子が大量に落ちてくる、が一瞬静止したかと思えばまるでビデオの巻き戻しのように元に戻って行く

「巻き戻ってる……?」

「ば、バカな!？」

騎士達が巻き戻る三沢塾を見ながら呟く。

「黄金鍊成（アルスⅡマグナ）……」

「アルスマグナ？」

「あれが僕らの敵、アウレオルスの本当の実力！」

三沢塾は完全に元に戻る。

あんな大規模なモノを完全に戻すとかどんなだよ……

ニャー。

呆然としていると、猫の鳴き声が聞こえてきた。

見ると、インデックスの頭に付けてるアレ（帽子……?）を引きずっている猫がいた。

「スフィinksス！」

スフィinksス……？

「え？ スフィinksス？」

「これは……インデックスの！
まさか……！？」

「スフィinksスとやらはよく分らんが、ここにコレがあると言うことは、インデックスがいるって事か……」

「何でアイツが……
早く行かねーと！」

「まあ、落ち着け、アウレオルスの居所は突き止めている」

・ ・ ・ ・ ・

俺達はステイルについて行く。

「本当だな？ 本当野郎の居所を掴んだんだな！」

上条がしつこくステイルに聞く。

「この僕が、無駄にビルの中を散策しているとしても思っていたのかい？」

そんな事を思う以前にアイツ、俺達を囷にしやがった！っていう怒りに埋め尽くされてたしな。

あ、そうそう、ステイルが言うにはアルスⅡマグナって言うのは言葉一つで何でも出来てしまうモノらしい。

何このチート……

だから第四波動も消されたのか……

ま、まあ、かなり低出力だったけどねっ！

いや、関係ないか……

てか、そんなチートからどうやって姫神を救い出せばいいんだ？

……アレ？

アウレオルスって吸血鬼を呼ぶために姫神を使ってるんだよな？

………何でアルスⅡマグナで吸血鬼を作らないんだ？

「なあ、ステイ、るっ！？」

前を歩いていたステイルがいきなり立ち止まる。

「クソッ!そういうことか!」

え? 何? 俺考え事してたから話聞いてない……

「三年も潜伏していれば世情にも疎くなると言うものだ……」

……つまりどういう事だ?

・ ・ ・ ・ ・

「姫神!」

俺達はアウレオルスと姫神のいる部屋までやってきた。

「! インデックス!!
クソッ!」

インデックスが机の上に寝かせられている。

上条がインデックスへと走り出そうとする、しかしそれをステイルが止めた。

「残念だが、君に目的を成し遂げる事は出来ないよ」

「ふん、今更ながら我が真意に気づいたか、ならばその体勢を前に己が無力に嘆き、嫉妬に身を焦がすがいい」

「上手く行くなら焦がし甲斐もあるんだがねえ……
繰り返すが君に彼女を救う事は出来ない、インデックスを救う事は
ね」

インデックスを？
どういう事だ？

「貴様はしくじったというだけの事だ、だが、私は……」

アウレオルスが寝ているインデックスを優しく見下ろす。

「私は、この子を、10万3000冊の魔導書を一身に背負い、決してその呪縛から逃れられる事の出来ぬ少女、にも関わらずその運命を受け入れてなお、己が不幸より他人の幸福のため……」

アウレオルスがインデックスの髪を優しくなでる。

「（……コイツ、インデックスを知っていたのか？）」

「そう、彼もインデックスのパートナーだったのさ」

「！」

「今年は君達、去年は僕、そして三年前のパートナーがこの、アウレオルス……イザードと言うわけだ」

「なるほど……」

「……これまで禁書目録は一年毎に記憶を消さなければ生きていけなかった

これは必定であり、人の身では抗えぬ宿命
しかし」

「逆に言えば人ならぬ身を使えば済む」

ステイルがアウレオールの言葉を先に言う。

「吸血鬼とは無限の命を持つモノ、無限の記憶を人と同じ脳に蓄え
続けるモノ。」

あるのだよ、吸血鬼には、どれだけ多くの記憶を取り入れても、決
して自我を見失わぬ術が！」

「なるほど、吸血鬼からその方法を教えて貰おうって訳か……」

ステイルはタバコを取り出し火を付ける。

「念のために聞くけど？」

その方法が人の身には無効だとしたら？」

「当然。禁書目録を人の身から外すまで！」

って事は……

「インデックスを吸血鬼にするって事か？」

その言葉に上条が怒りに顔を歪め拳を握る。

「必然。それでも禁書目録が救われる事には変わりはない！

貴様にもそれは分かるはず、正しく一年毎に眠り狂う、この子の最
期をみたであろう貴様には！」

コイツもインデックスの事が本当に大切だったという訳か……

「ふー、どうあっても自分の考えは曲げない、か。」

それなら、ほら言ってるやれよ今代のパートナー、致命的な欠陥を抱えた目の前の錬金術師に」

ステイルがタバコをふかしながら言う。

そして上条がアウレオルスに言い放つ。

「お前、一体いつの話をしてんだよ」

「何？」

「そう言うことさ、インデックスはとくに救われてるんだ。君ではなく、ここにいる上条当麻とその他によってね」

その他？ その他って俺か！？

いや、確かに上条が魔術を解いたけどさあ……

「あ、ありえん！

魔術師でもないただの人間に、一体何が出来ると言うのだ！？」

「必要悪の協会ネセサリウスの、イギリス正教の沽券に関わるので他言は控えるが、そうだね……

コイツの右手は幻想殺しという、つまり人の身にあまる能力の持ち主って訳だ」

「待て！ ならば……」

「そう、君の努力は全くの無駄骨だったと言うわけだ、だが気にするな、インデックスは君が望んだ通り、今のパートナーと一緒にいてとても幸せそうだよ？」

その言葉にアウレオールの顔が驚愕に染まる。

後退り、机にぶつかる。

その衝撃でかは分からないが

「とうまあ……」

インデックスが寝言を言い始めた。

「とう、まあ……」

「インデックス!!」

上条やステイルがインデックスを心配そうに見つめる。

勿論、俺もな。

「とうまあ……..
お腹減った」

瞬間、上条がこけかけた。

「ええ、こんな時でも飯のことかよ……」

インデックスはどんな夢を見てるのかね？

すっごい幸せそうな顔をしてるよ。

「プッ、クククク……」

コイツはいい！」

ステイルが肩を震わせ笑っている。

「あ……は、ははは……ハハハハ！」

上条も笑いだし、錬金術師も笑いだすがどう見ても愉快だから笑っているようには見えない。

そして

「倒れ伏せ！ 侵入者ども！！」

「がっ！？」

床へと何かに引っ張られるかのように叩きつけられた。

体が全く動かない……！

「我が思いを踏みにじり、我が進化をあざ笑い、良からう、この屈辱、貴様らの死で贖ってもらおう！」

「待って！」

「！？」

姫神が俺達の前に達、アウレオルスを止める。

第十二話 竜王の顎（前書き）

今回の話はもう、殆ど二巻、失敗しました、まさかの二巻とほぼ同じ……

みなさんにアンケート的な何か次の番外編に1から4の誰が登場して欲しい？

？絹旗最愛

？フレンダ

？佐天

？普通に男共

第十二話 一竜王の顎一

（魔法が欲しかった）

（私が呼び寄せた）

『ごめんね、秋沙ちゃん……ごめんね……』

『ごめんね……ごめんね……』

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……

（大切な友達。大切な家族。みんな。みんな。あたしの前で……）

『―――また。殺したのね……』

（これ以上。誰も傷つきたく無かったから……）

『本当に。本当にこの血で誰かを救えるの？

本当にもう誰も傷つけなくて済むの？』

（その微笑みには。これっぽっちの嘘も。

あるのはたった一つの願い

愛する人を救いたいという）

―――だから。私は―――

・
・

・ ・ ・ ・ ・

「姫神！ 姫神！！」

「フハハ、吸血殺し（ディープブラッド）などもはや無用！
悠然。約束は守った。

これでその女も、己が血の因果から解き放たれたであろう
フハハハハハ！！！！！！」

姫神が死んだ。

しかし、上条の右手の効果により姫神は息を吹き返す。

「な……我が、黄金鍊成を打ち消しただと？
ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定した！
その右手、聖域の秘術でも内包するか！？」

アウレオルスがうろたえる。

「ゴチャゴチャうつせえ……！！
んなこたあ、もうどうだっていいんだよ！！」

上条が姫神を床に寝かせ立ち上がる。

「いいぜ、テメエが何でも思い通りに出来るってんなら……」

「まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！！」

・ ・ ・ ・ ・
「……ハア、床冷てえ……」

ステイルが呟く。
確かにねえ……

上条さんは動いてるけど、俺達放置されてるしねえ……

「しりとりでもする？」

「……しないよ」

さいですか。

・ ・ ・ ・ ・

上条とアウレオルスは互いに見つめ合う。

そしてアウレオルスがポケットに手を入れ針を取り出した。

それをみた上条がアウレオルスに向かい走りだす。

「窒息死」

「ぐあっ！」

アウレオールの言葉で上条は息が出来なくなる。

「あ、が……あ、あ、あ……」

上条は震える右手で喉に触れる。

幻想殺しにより窒息死が打ち消される。

「はぁ！！ はぁ、はぁ……」

「感電死」

アウレオールから電撃が放たれる。

「ぐ……う……！！！」

幻想殺しにより電撃も打ち消す。

「圧殺」

上条の頭上に車が現れ落ちてくる。

上条はとっさに右手を上に向け、それも打ち消す。

（奴の攻撃は右手で消せる！）

「なるほど。」

新説。その右手、私の黄金鍊成を例に漏れず打ち消すらしいならばこそ、右手で触れられぬ攻撃ならば打ち消す事は不可能なのだな？」

その言葉に上条はハツとした顔になる。

アウレオルスは首に針を刺し

「銃をこの手に、弾丸は魔弾、用途は射出、数は一つで十二分！」

アウレオルスの手に銃が現れる。

「人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ！」

瞬間、銃から放たれた弾は上条の横を凄まじいスピードで通りぬけ、壁を破壊する。

「な……」

「ふん、簡単には殺さん。

もう少し私を楽しませよ！」

「あ……」

上条が後退る。

「先の手順を量産！」

両の暗記銃にて同時射出……！」

「がはぁ!？」

大量の弾丸が上条に撃ち込まれる。

「ぐ……ゴホッゴホッ!!」

「……………な……………!?!」

しかし弾丸は上条を貫くことはなかった。

「ハッハッハ!!」

言っただろう、簡単には殺さんとなあ!」

「ぐ……クソオ……!!」

「準備は万端!」

両の暗記銃、同時射出を「ふん、何だそれは?」

アウレオルスの言葉を遮り、ステイルが口を開く。

「本当に言葉一つで現実を歪めてるみたいじゃないか」

「当然。黄金鍊成は鍊金術の到達点、今や世界」

「だったら、何故、吸血殺しを必要とした?」

「!?!」

ステイルの言葉にアウレオルスの表情が怒りに変わる。

「だって、何故、吸血鬼を呼び寄せる必要がある? 作ればいいじゃないか、吸血鬼くらい」

「そう、それ俺も思った」

左天がもぞもぞと動き俺も俺も！というアピールをする。

「言葉一つで命じるままに、何故だ、錬金術師

何故、黄金鍊成とやらで吸血鬼を創らなかった？

いや、それ以前に何故そんな遠回りを「宙を舞え！ロンドンの神父
！！」

ステイルが宙に浮かび上がる。

「ステイル！！」

「……全てを、言葉の儘に歪められるのなら」

「弾けよ！ ルーンの魔術師！」

ステイルの服、皮膚が全てが弾け、血管と骨と内蔵のみの姿になった。

「！？ うぷ……！！」

上条がとっさに口を抑え吐き気を止める。

「ステイル！！ クソ、何があった？ 見えやしねえ！！」

左天は地面と接触している左手から熱を吸収する。

「ストリーム「腕よ千切れ飛べ！ 能力者！！」

ブチブチブチ!!

「な!?! がああああ!?!」

風を自分へ叩きつけ無理やり姿勢を変えようとするが、アウレオルスにより左腕が千切れ飛び血が大量に溢れだした。

「左天!!」

上条が叫ぶ。

「ふん」

(クソッ! どうすれば!?)

……………そうだ、コイツの目的は……………)

インデックスをチラリと見る。

(全てを言葉のままに歪められるんなら、何でコイツは、インデックスの救いを命じなかった?)

「興が削がれた、射撃を中止!」

(思えなかった? 救えるなんて)

「刀身による斬撃に変更!」

銃から剣が伸びる。

(だから口に出来なかった?)

「さて、貴様の自信の源は、その得体の知れぬ右手だったな？」

刀身を上条の右手へと向ける。

（そう言うことか……!）

「なら、まずはその右手を切断する事にしよう」

（コイツの力は、言葉のままに現実を歪める事じゃなくて……）

「暗記銃、その刀身を回転射出せよ！」

銃から剣が回転しながら放たれる。

それは吸い込まれるように上条の右手へと飛び

「……!!」

切断した。

血が大量に吹き出す。

「くく、クハハハ!!」

アウレオルスが高笑いをするが……

「ククククク……!」

「なっ!？」

上条が笑いだしたことにより止まる。

「おい、錬金術師」

上条が口を開く。

「デメエ、まさかこの程度で俺の幻想殺しを潰せるとか思ってたんじゃないだろうな？」

「ひっ！」

アウレオルスが針を取り出そうとして地面に落とす。

しかし、それを取り、首えと刺そうとする、が

【ストリームディストーション!!】

針が全て風により手の届かぬ位置へと飛ばされる。

「なっ!？」

「はぁ……」

やばいなぁ、目が結構霞むぞ……」

あとは頼みまーす、上条さん、と力なく左天は目を閉じた。

「アレがなけりやぁ、ハイにもなれねえなぁ……
雑念を掻き消せないよなぁ？」

「ああ……ああ……!」

「どおした？ 言葉にしてみろよ？」

「く、来るな！ 来るな！」

アウレオルスは上条から逃げるように後退る。

「言葉のままに、歪めてみるよ？」

「く、来るなああああ！！！！」

インデックスの眠る机まで走り逃げる。

「（ありえん！ 我が黄金鍊成がその効力を失うなど！
……！！？ 待て！ 考えるな！ そんな事を考えては！）はっ！？
うあ……！！？」

「ふん」

アウレオルスの目の前には元の姿に戻ったステイルがインデックスを抱きかかえていた。

（止める、考えるな！
信じよ！ 私の力をもってすればこんな奴らになぞ……！！？）

「適いっこねえよな？」

「は！？ ああ……！！？」

アウレオルスの背後にはいつの間にか上条が立っていた。

「何故なら、テメエの能力は、言葉のままに現実を歪める事じゃなくて、考えた事をそのまま現実にしちまう……」

(こ、コイツは、化け……)

「力なんだからなあああ!!!!!!」

グオオオオオ!!

上条の右腕がドラゴンの頭になり、アウレオルスに牙をむく。

「うあああああ!!!!!!」

・ ・ ・ ・ ・

「よく、くつついたもんだね？」

君達の体って意外とファンタジー？」

カエル先生が驚いた、という表情で喋っている。

あの後、気がついたら病院にいた。

千切れてもう治らんだろうって思った腕がくつついてた……

マジか……

「君の腕なんて何か凄い力で引き千切れたように取れてたのに、本当、よくくつついたよ。

奇跡だね？」

すげえな……

先生は安静にしておくんだよ？　　と言い病室を出ていった。

「やれやれ……

まさか俺も入院する事になるとは……」

「ふむ、見かけによらず名医なんだな、あの医者」

お？　　ステイルが果物の詰め合わせを持って病室に入ってきた。

・ ・ ・ ・ ・

「別になれ合うつもりはないんだがね
一応、様子を見にきてやったよ」

ステイルがリングを剥きながら喋る。

いや、言っちゃ悪いがお前がリング剥いてるのシュールだな。

「ああ、そう」

上条が微妙な表情をした後、神妙な顔つきになる。

二人は竜がどうの言っている。

なにそれ？

「アウレオルスはどうなったんだ？」

「全ての記憶を失った。

魔術師の使う能力もね。

トドメを刺すのも目覚めが悪いし顔、形をかえて野に放ってやったさ
十三騎士団の目を盗むのには少々てこずったがね」
なるほど。

顔、形か……

アウレオルスは女になったのかね？

話を聞いて行くと三沢塾も閉鎖される事になったらしい

「礼を言おうと思ったけど何だか馬鹿馬鹿しいんだよねえ

結局、君がやった事ってアウレオルスを自滅させただけ何だから」

「ふん、俺の素敵演技力に感謝しろ、なんつったて腕一本ぶった斬
られた痛みに耐えながら、奴を震え上がらせるのに十分なハツタリ
をかましたんだからな」

「俺は引き千切れたがな

斬られるより引き千切れた方が絶対痛い。

お前も引き千切ってやろうか！」

「恐れよ!？」

「はあ……」

ステイルが溜め息をつく

そして、廊下の方から「とうまー！」と言うインデックスの声が聞こえた。

ステイルはすぐさま窓から外に出ていった。

速っ！

「とうま！　とうま聞いたよ！　今回はあいさの為に戦ったんだって？」

ちなみに俺もな！

インデックスちゃん、たまに俺の存在忘れるよね？

てか、姫神エ……

何であんな微妙な所からこっち覗いてんだ。

「い！？　姫神？　何でお前とインデックスが一緒に？」

「別に一緒に来たかった訳じゃないんだよ？

ただ、あいさがどうしても、とうまにお礼がしたいからって」

……………俺は？

俺は！？　ねえ俺は！？

畜生……

哀しくて血涙が出るぜ……

まあ、なんやかんやで上条さんが姫神に格好いい言葉を書いて、姫神がポツてなりましたね
はいはい、一級フラグ建築士だね。

「あ！ スフィックス！勝手に出ちゃ駄目だよ！」

「な、お前、病院に猫連れてくるなよ！」

インデックスはインデックスでスフィックスという猫を連れて来とるし。

しかも逃げ出して、病室で走り回ってるし。

てかスフィックスって名前……

そして、

「ああ、もう！ 不幸だああ！！！」

毎度お馴染み上条の悲鳴が病院に響き渡った。

———三沢塾編 完———

番外一 八月九日一（前書き）

絹旗に決定！

番外一八月九日一

昨日は姫神やらアウレオルスやらと大変だったなあゝ

腕、引き千切られるし……

まあ、昨日の今日で街を歩いてる俺も俺だが……
上条には止められたが取り敢えず放置。

しかしあれだね、左腕でも使えないのは不便だな……

取り敢えず……ブラブラしようか……

・
・
・
・
・
・

カランカランカラン！

「おめでとう、大当たりゝ！」

マ ジ か よ！

何か、ブラブラしてる課程でドラクエの毎く福引き券を拾ったから
やってみたら当たっちゃったよ。

「4等 大当たりゝ」

「4等!？」

あ、4等でしたか……

1等かと思ったよ……

なにこの落胆。

4等で、せめて3等にしろよ……

で、結局賞品は映画無料券

……何か鬼門としか思えないんだけど

まあいい、行ってみるか。

•

•

•

•

•

●

映画館

うわあ、人いねえ……

こんな所で映画見ても……

てか見たい映画がないわ！

……さて、どうしようかな……

などと考えていたら

「はぁ、超不幸です……」

って声が聞こえた。

そこに目を向けると、何かうなだれている、小6くらいの女の子がいた。

てか裾、短っ！

見えるぞ、いや、見えそうで見えない。

この子、出来る！

「何か超不穏な眼差しを受けてるんですが、何ですか？」

何！？ バレただと？

ヤバイヤバイ

「い、いや、何してるのかな〜って」

「ロリコン……？」

「いやあああ！！ そんなごみを見るような目で見ないで！！」

私は何か不幸なオーラを纏ってる少女が気になって見ていたのですよ」

てか映画館で不幸オーラ出すって見たい映画が見れなかったのか？

「あ、コレいる？」

「超何ですか？ ソレ」

「無料券、お金がないから見たい映画見れないのかな」と

俺、見るものないしな。

「お金は超あります。

ただ……」

「ただ？」

「超カップル限定でして」

「うわぁ、面倒くさい」

あるよな、カップル限定、うなもんいるかぁ!!
リア充爆散しろ!

「いや、てかカップル限定とか未だにあっただな……」

「はい、だから超不幸なんですよね」

この映画は諦めるしかないか……と溜め息をつく少女A

「……………じゃぁ、俺と一緒にいきましょうか？」

「え？」

「カップル限定なんでそ？」

なら俺達はカップルだぜい! 的な感じで行けば入れると思うんだ
よ」

「やっぱりロリk「違う！ 違うよ！ 違いますよ！ 三段活用！」

ああ、上条がよく言ってたなあ三段活用……

「てか見たいんならいいじゃない、行こうぜ」

「あ！ え、と……」

「ああ、俺の名前は左天な」

「超左天ですか……」

私は【絹旗 最愛】です」

モア……すいません何でもないです。

てか超左天て……

なんか超サイヤ人みたいなの……

・
・
・
・
・
・

まあ何だ、結論から言えば入れた。

受付の人には不穏な視線を送られたがなっ！

「てか15禁だったんだなこの映画

あれ？ てことは絹旗は15歳いってるのか？」

「いえ、超15歳未満ですが何か？」

「何か？　じゃねえよ

いや、まあ何も言わんがな……」

まあ、何だかんだ言いながら会場に入る。

うわっ、誰もいねえ……

すると隣の絹旗が何かいきなりクネクネしだした。

「ああん！」

「おお！？」

「ここだけの単独上映で、客は私だけ。つまり、この作品の素晴らしさを超理解できるのは私だけ！」

とか何とか、うわあ、濃いなコイツも……

軽くトリップしかけながら席についた絹旗を追い、横に座る。

この映画の上映時間は大体90分くらいか？

面白ければいいがな……・

・

上映開始

こ、これは……

見なくたって分かる！

これは——駄作だ……

よくこんな見る気になったのと、絹旗の方を見ると、絹旗は真剣な表情でスクリーンを見ていた。

何かあるのかと、まだ始まったばかりだし見ず嫌いは駄目かと俺も色々注意しながら見る。

・
・
・
・
・

……………ZZZ

ハッ！？

アレ？何が起きた？

あ、俺、寝てたのか……

ダメだ、頑張っても寝てしまう……

俺は本当にこんなのが面白いのかと思隣の絹旗を見てみる。

すると、絹旗は先程とは違い、イスに深くもたれかかり冷めた目で

「だぁー、超つまんねー」

と言った。

「つまらないのかよ

さつきかなり真剣に見てたのに」

「つまらないモノはつまらないですよ
ほら、もうオチが超見え見えですし」

確かに……

半分寝てた俺でも、あ、コイツは死ぬな、とかよく分かるわ。

コイツは稀にみるC級映画だなあ……

・
・
・
・
・
・

上映終了。

で、今はなんだかんだで絹旗と一緒にファミレスに来ている。

「いや、うん、もう二度と見たいとは思わないわ……」

「超つまんなかったですしね」

あれって上映期間に見る人何人いるんだろうな……

「でも、超楽しかったです

友人達とは超趣味が合わず、いつも一人で見てましたから」

「そうか、ま、俺でよけりゃ、また映画見ようぜ」

「あ、はい、超ありがとうございます」

やべえ、こんな妹欲しい……

ああ、てかちよい聞きたい事が……

「さっき思っただけどさあ

俺達どこかで会った事ないか？」

何か絹旗を見たことある気がするんだよなあ

「え？　そうでしたか？　超覚えてないです」

「どこだったかなあ……？」

んゝ……………パフエ……………」

……………パフエ？

パフエ……………あ！

「あ！　超思いだしました！

あの時フレンドのパフエを超食べてた……」

「あの理不尽八つ当たり娘がいた4人組の中にいたな……」

……………あの八つ当たりちゃん、あの後どうなったんだろ……………？

「その後、フレンダは地団駄を踏みながら絶対に殺す！　って超言
ってましたよ」

マジで？

恐いわ！

「あ、今日俺とあった事はあの娘には内緒でたのみます！」

「別にいいですけど、超言わない代わりに教えて欲しい事が超ある
んですが」

「ん？　何だ？」

「あの時、地面を凍らせたり、風を超起こしたりしてましたよね？
左天の能力は超何なんですか？」

能力か……

言っているのか……

「まあ、詳しくは言えんが、俺の能力は第四波動だよ」

「第四波動って……」

それに左天……

超待ってください、あなたもしかして、第八位ですか？」

おう、知ってたのね」

「元な元、今はレベル0だよ
能力は普通に使えるがな。」

絹旗にどういう事か説明する。

まあ俺自身あんまわかってないがな。

「レベル5級の技が超使えるのにレベル0なんて殆ど反則じゃないですか」

「レベル0だと油断してる相手を楽に倒せるから俺としては嬉しいが」

まあ、レベル0とかそんなん関係ない奴には意味ないがな。

「そういえば、その腕は超どうしたんですか？」

「ああ、これ？ 昨日、超能力とかそんなん関係ない奴に引き千切られてな

こう、ブチブチ！っと

本当なら病院から出ちゃいけないんだが」

「な、超ダメじゃないですか！

早く病院に戻らないと！」

「ええ」

ええじゃ超ありません！ と言われ渋々帰るハメに

「まあいいや、今日は楽しかったよ、また会おうな」

「はい、また

超安静にしておくんですよ！」

そう、言葉を交わし、俺は病院へと帰った。

まあさっさと腕治さんと体なまるし……

絹旗か……ホント、また会えるといいな。

まあ、あのフレンダという奴には会いたくないがな！

第十三話「マネーカード」(前書き)

今日はいつよりも、短め

第十三話―マネーカード―

ああ、今日も元気に散歩に行くか

昨日、絹旗に安静にしてろって言われたがやっぱ動かないと

「お前、いつも何かきつかけがないとボーっとしてるのに、何でこういう時だけ活発的なんだよ……」

「さあ？」

「さあ？ って……」

はあ、まあいいけど、早く帰って来いよ、また看護師さんに怒られるぞ」

と、溜め息混じりに言う上条さん。

まあ、安静にしておかなきゃ行けないのに抜け出してる時点で怒られるのは確定だがな……

・ ・ ・ ・ ・

さあて、今日はどうしようかな

何か重要な事が起こりそうな気がするんだよねえ……

まあ、いつも通りブラブラしますか……

・
・
・

見つけた。

ブラブラしてたら見つけた。

「おい、佐天さん」

佐天さんが何か犬みたいに四つん這いで何か探してたんだが……

「え？ あ！ 左天さん！」

「久しぶりだな、何してんの？」

「最近噂のカード探しです！」

カード？

なんじゃそら？

「ほら、コレです！」

あたしもう4枚もゲットしたんですよ！」

そう言って渡してくれたのは

「これ、マネーカードか……？」

「最近、色んな場所に落ちてるんです

偽物とかじゃなくて、ちゃんと使えるんですよ」

ほほう、落ちてるか、こんなに大量に落ちてるんなら誰かが置いて行ってるんだろうが……

また物好きな奴もいたもんだな」

「なら俺も一緒に探してみようかな」

「ホントですか!？」

あ、でも腕怪我してるみたいですけど……」

「ああ、激しく動かなければ大丈夫だから」

・ ・ ・ ・ ・

「あ、みつけ」

早速一枚ゲットしてしまった……

それっぽい場所探せばすぐ見つかったじゃん

………上条に持って行ってやろうか……

「わあ! やりましたねー!

この調子でどんどん行ってみましょー!」

などと探していると

「佐天さん? それにアンタも、何してるの?」

と、声をかけられた。

「おお、御坂か

いや、ちよつとダブルサテンで最近噂だと言う、カードを探しててな」

「あたしはもう4枚もゲットしたんですよ！

あ、そうだ！ 御坂さんも一緒にやりましょう！」

御坂の腕を引っ張る佐天さん。

「え？ いや、私は……」

「よっし！ 次はあっちに行ってみましょう！」

「ええ！？」

御坂の言葉を聞かずズンズンと御坂を引っ張って行く。

いや、あの子なかなか面白い性格をしてるなあ……

・ ・ ・ ・ ・

「いやー、すっかり陽が暮れちゃいましたねー」

あれからかなり探して俺は4枚ほど手に入れました。

陽も暮れたので今日はお開きという事になった。

「今度、またやりましょうねー！
それじゃ、ウチこっちなんで！」

と、佐天さんは帰っていった。

うん、元気な子だ。

「コレ、どうしょ……」

「ジャッジメントかアンチスキルに届けるのもよし、ネコババして自分のおこずかいにしてもよし、だろうよ。
俺の選択は静かに懐に入れる、だな」

内二枚は上条に恵んでやろう！

「ハア、まあいいわ

じゃ、私もう、行くわよ

アンタも腕怪我してるんだから早く帰りなさいよ」

「おう、お前も門限あんだから早く帰れよ」

そう言って御坂と別れ、俺は病院へと帰る。

マネーカードを置いていってる奴を探すのもいいけど

そろそろ帰らんと看護師さんに怒られるからな……

第十四話 一布束 砥信一

とか思ったりもしたが

俺が気になる事をほおって帰るとか、ありえんだろう？

なのでマネーカードを置いていって人物を探そうか

ま、消灯までに病院に戻りゃいいだろ！

・ ・ ・ ・ ・

「――と、言うわけ」

「アンタ人生を自由に生きすぎでしょ」

そう、人物探しをしながらブラついてたら何かスキルアウトらしき奴らを尾行してる御坂を発見。

ミッチー☆ってノリで声かけて、一緒に尾行する事にした。

なんでも、あのスキルアウト達はマネーカードを置いている人物を見たらしくて、現在進行形でその人物の下に向かってるみたい。

速攻目的が達成されそうだな。

万が一スキルアウトに喧嘩売られても、こっちは超電磁砲がいるから大丈夫だろ

もしダメでも周囲の温度をサウナの5、6倍にするか極寒にしたら逃げるだろ、多分。

と、スキルアウトさん達が雑居ビルっぽいところに入っていた。

「追いかけるの？」

「もちろん！」

俺達もスキルアウトを追い入る。

・
・
・
・
・
・

「ぎにゅあああああああ!!!!!!」

うん、雑居ビルに入って奴らの入った部屋の入り口近くで覗き見してるんだが……

マネーカードを奪い……もとい、貰いに行ったスキルアウトの一人が恐ろしくギョロ目の女性にやられた。

あれは、マジか、と。

ギョロ眼恐ええ……

あの眼で見下されてみる、その手の奴らは一瞬だと思うわ。

「『寿命中断（クリティカル）』

私の能力は私と接触した相手のみしか対象にできないわ」

寿命中断……

いや、能力も恐いわ！

「however

一度触れてしまえば、どこに逃げようと必ずその命を絶つ事ができるの」

てかそんな能力なくね？

「…何だそりゃ？

そんな妙な能力聞いた事ねーぞ」

《実際にそんな能力あんのか？》

《あるわけ無いでしょ。

いや、絶対にないとも言えないけど……》

ふむ、無いなら無いで、あのギョロ子さんスゲエな、話術だけでスキルアウトを相手にするとか。

そーいやあの制服、長点上機学園のか、超エリート校だしやっぱ普通とは一味、二味違うのかね？

てか、スキルアウトがギョロ子さんを潰しに掛かってんだが、ヤバくない？

《ギョロ子さん、ヤバくないか？》

《ギョロ子って……

大丈夫よ本当に危なくなったら割り込むから》

ふむ、じゃあもう少しみてようか。

・ ・ ・ ・ ・

結果。

ギョロ子さん圧勝。

スゲエエ……！

パチパチパチパチパチ……

と、御坂が拍手しながらギョロ子さんの前に出る。

俺はスキルアウトをそこにあった棒でツンツンしてる。

コイツらみんな生きてるな……

やっぱ話術で圧勝したのか、凄まじいな。

さて、御坂達は……

ギョロ子さんが御坂をジーっと見てる。

そして

「あなた、オリジナルね」

「え？」

そんな事を言った。

オリジナル？

どうということだい。

「オリジナル？」

「あなたも噂くらい聞いた事あるでしょう？」

「噂って……！？」

ハッとなる御坂。

「アンタあの噂の事何か知ってるの！？」

御坂がギョロ子さんの肩を掴み詰め寄る。

ゴスッ！

ギョロ子さんの持つカバンが御坂の頭に振り下ろされた。

「お？ おお~~~~~？」

御坂は頭を抑えて呻いている。

「あなたは中学生、私、高校生、長幼の序は守りなさい」

タメ口禁止とギョロ子さんが言う。

「…………あの噂の出所について、何かご存知なのでしょうか？」

「御坂の敬語とか……………プツ」

ビリビリ！！

おうふ！？

「さっきから気になってたのだけど、あなたは？」

「あ、俺は空気とでも思っていてくれたらいいから」

て、訳で空気に徹する事にする。

「……………今の質問だけど、あなたよりは知っているわ。

私がいた頃とは目的も内容も随分変わってしまったようだけど」

「？」

「知っても苦しむだけよ

あなたの力では何もできないのだから」

「私は何を知ってるのかって聞いてんのよ！
それにアンタだったら何ができおゴフう！！」

御坂が脇腹にローリングソバットを決められる
ああ、タメ口聞いたからから……

それから、また敬語になった御坂にギョロ子さんが話す。

何でもマネーカードをバラまく事で、普段人目につかない場所に意識を向けさせて、学園都市の監視カメラの穴を人の目で埋めたら、そこで行われる筈だった実験を阻止できるかもしれないからって。

実験って何だ？

「でも私自身が目撃きされて、尾行されるとは迂闊だったわ」

ギョロ子さんは置いてあった机に近づき引き出しを開ける。

そこから何かの資料のような物を取り出し

「家捜しされてコレを見られたら面倒な事になっていたかもしれないから」

ライターで火をつけ燃やす。

「やはり形の残る物はダメね
ここも勝手に間借りしてただけだし

この人達が目を覚ます前に退散しましょう」

「ちょ、ちょっと待って!! ……下さい」

「あ」

あ、御坂が肩を引っ張ったから燃えてる資料が手から落ちたな……

「何の話をしているの？」

「アンタは一体何を知って……」

ギョロ子さんはその事には答えず床を指差す。

さっきのが他の紙に燃え移っている。

「indeed」

証拠隠滅するなら現場もろとも目撃者も消してしまえと……」

「え!?!? 違っ……」

「「知らない」」

「ちょっと待って!」

コイツらは……って何アンタも逃げてんのよ!」
しょうがない……

炎ならば俺の出番か……

・
・
・

・ ・ ・
んで、結局ボヤ騒ぎに留めました半端に燃えてたら怪しいな
スキルアウトはみんな怪我はないよ。

しかし、御坂さんがかなりキレてまして。

まだ聞きたい事があるのにー！って事で長点上機学園の学生名簿を
ハッキング中。

「お前、すごいな……

公衆電話からハッキングとか……

流石は超電磁砲」

「ちょっと、黙って。

………

ッ………いたっ！」

御坂のもつ携帯端末に学生名簿が表示される。

その中にギョロ子さんがいた。

名前は【布束 砥信】

幼少時から生物学的精神医学の分野で頭角を現し、樋口製薬・第七
薬学研究センターでの研究期間を挟んだ後に本学に復学。

だそうで。

やっぱ結構凄い人だった。

「樋口製薬・第七薬学研究センター
ここで私のDNAマップを使った研究を……？」

御坂は何か決心した感じで端末を閉じる。

「ここに直接潜入して確かめてやるわ！」

「待てい」

と襟首を掴み引き止める。

「何よ！ 止めても無駄よ」

「いやいや、その格好で行く気か？」

「あ、そっか流石に制服じゃマズい」

「まあ、何かよく分からんが、無茶はするなよ」

「分かってるわよ」

ホントかよ……

まあいい。

「俺もついて行ってみたいが腕がこんなだからな、今日はもう帰るよ
重ねて言うが無茶はすんなよ」

「分かってるってば！
じゃあね！」

と言ひ御坂は走って行つた。

「それにしても……」

やっぱ朝に思った通り何か重要っぽい事が聞けたな……
現段階じゃさっぱり分からんが」

ま、今はさっさと病院に戻るかな……

第十五話ーミサカミサカミサカー（前書き）

友人「左天がシメオンという暗部を作るとかどうだろう？」

作者「ねーよ」

てか、原作15巻にさりげなく佐天さんがいるね

こないだ気が付いて吃驚した。

第十五話ーミサカミサカミサカー

「とうまー!!」

「やめっぎゃあああああ!!!!」

……アイツ何したんだ

インデックスに思いっきりかまれとるやん。

ああ、そうそうアレから5日たちました、と

病院も退院して腕の調子も結構いいぞ!

御坂に会う機会がなかったが……

大丈夫だったろうか……

ま、アイツの事だ大丈夫だろう。

「上条君。頭。大丈夫?」

「ちょっと待て姫神。

それはどっちの意味の大丈夫だ?」

「……………ふふ」

「何ですかその含み笑いは!?
ちくしょう! 不幸だあ!!」

いや、マジで何があったお前ら。

・
・
・
・
・
・
・

いやね？散歩してたら後ろ姿を見たから普通に話しかけたのよ、あの時、どうなったんだー？ってね？　そしたらね？　誰だコイツみたいな顔で首を傾げられたのよ。

人違いじゃないはずなんだよ、格好は同じだしね？
でも何か目にハイライトがないし暗視ゴーグルっぽい頭につけるし何か違うかな？とか思った訳で

「結局お前は御坂なのか？」

「ですからミサカはミサカですとミサカはいい加減うんざりしながら答えます」

ミサカミサカと……

何か違うよな

「いや、お前は学園都市 第三位 超電磁砲の【御坂 美琴】 じゃないのか？」

「お姉様の事を言っていたのですね、とミサカはやっと納得します」

お姉様……？

アイツ、妹いたのか……？
しかも双子の。

「なら妹さんに自己紹介を、俺は左天ね
お姉さんとはなんだかんだで知り合いですね、はい
妹さんは何をしてるんだ？」

「私は今研修中です」

「何の？」

「禁則事項です」

その言葉はみ………いや何でもない

それにしても禁則事項か……
何か気になるな

ま、いいか。

「大変じゃん！」

「ぬ？」

何か違う方から声が聞こえたと思ったら

あれは、黄泉川先生ではござらんか。

「先生、何してるんですか？」

「あ、左天じゃん！」

この車に赤ん坊が置き去りにされてて大変じゃん！」

本当だ、こんな暑い日に車に置き去りとかふざけすぎだろ……

「よし、ここは俺の力技で……」

「待ってください、私がやります、とミサカは一步前に出ます」

妹さんが言葉通りに一步前に出てバチツと電気をだし車のロックを解除する。

「おお！サンキューじゃん！」

「流石、御坂の妹……」

やはり電気なのか……」

ってアレ？

どこいった？

と、思ったら近くの木の上を見つめている。

「どうかしたのか？」

「ミャー、と鳴く四足歩行生物がピンチです」

何だと思いい上を見上げると、子猫が木の上で震えている。

「先ほどのミサカの力に驚き木に駆け上がり、降りる事が出来なくなったようです、とミサカは懇切丁寧に経緯を説明します」

ふむ、なら助けようか……

俺は熱エネルギーで脚力を上げ、ジャンプする。

「よっと」

そして、猫を確保し、着地。

よしよし、可愛いなア

「この生物は何なのですか？」

「ん？ そんな事を知らないのか？」

猫だよ、コイツはまだ子供だから子猫だがな」

「子猫、ですか」

てか妹さんは何だ？ 箱入りなのかしら？

猫知らんで、マジか。

「……………コネコ、下から読んでも上から読んでもコネコ…………フフ」

うん、変わった子だ。

そうこうしていると背後から足音が聞こえた。

振り向くとそこには息を切らせた御坂が立っていた。

「よー御さk「アンタ……何者!？」」

……何ぞや？

「どうした？ 御坂。」

いや、てかお前、何者って、妹だろ？」

「ソイツは妹じゃないわよ!」

妹じゃないって……

「それは単純に大嫌いだからか？」

それとも言葉通り、本当に妹じゃないのか？」

「……………」

御坂は妹さんを睨みつけている。

「オーケーわかった。」

俺は取り敢えず退散するから。

二人で話し会うなりなんなりしとけ」

何かよく分からんが俺はいない方がいいと思うし。

じゃあな、と俺はその場から離れた。

・
・
・
・

・ ・ ・

　　夜

あの後アイツらどうなったのかね？

御坂の態度も気になるよな

妹じゃない、か。

うーん……

まあ、考えても仕方ないし、飯でも食いに行くか……

上条んところはインデックスが来て食費が半端ないらしいから、たか
りに行けないんだよね……

・ ・ ・

　　ファミレス

だから、一人で来るファミレスほど悲しいものはないよ。

まあ、いいや、何食べよう

………また、パフェ来たりしないだろうな………

・ ・ ・

・
結局ステーキを食べる事にした。

美味し。

「あ！」

ん？

「あ……」

「この間の変態！」

「変態とか言うなあ！

てか俺、運悪すぎる……」

まさか、あのフрендаとか言う奴がいるとは……
てことは絹旗とかもいんのか？

「ここで会ったが百年目……」

「ちよっ、待て！　ここじゃ洒落になら——ッ！？」

何だ！？

あっちの方から巨大な熱量を感知できたぞ！？

爆発……？

ちよっ行ってみるか……

「結局、なんな訳よ？」

「スマンね、用事が出来た、また今度な！」

俺はファミレスを飛び出し、熱量を感知出来た場所に向かう。

熱で強化しウサイン・ボルトも吃驚な速さで走って行く。

第十六話 一方通行 (前書き)

友人「第四波動じゃなくて、ドッペルゲンガーとかの方がよかったんじゃない?」

作者「根本からケチつける気か貴様っ!」

第十六話 一方通行

とある鉄橋に二人の人影がある。

一人は白髪少年、もう一人は先ほど出会った、御坂妹。

御坂妹はボロボロで頭や肩から出血している。

白髪少年に攻撃されているようだ。

御坂妹は再び少年が繰り出す攻撃を直撃し倒れる。

「どーした、どーしたア

そろそろヘバツちまったかア？

それとも諦めちゃったのかなア」

「ミサ：カは、目標の能力を正確に把握できていません……がこれまでの実験結果から周囲にバリアのようなものを張り巡らしていると推測します」

御坂妹は起き上がりながらそう言葉を紡いでいく

「目標が地に足をつけて歩行している事から下方：少なくとも足裏には能力は展開されていないと思われるため、足裏からの奇襲がもつとも有効であると結論づけます」

「何ブツブツ言ってんだ？

逃げなエなら終わりにすンぞ」

少年が近づいてくる

「……逃亡ではありません

計画通り、目的地への誘導を達成した、とミサカは訂正を求めます」

そして、御坂妹は少年の足元に設置されている爆弾に電気を飛ばし起動させる。

そして少年は爆発に包まれた。
辺りに煙が広がって行く。

「……目標……完全に沈黙……？」

瞬間。

煙の中から少年が飛び出してくる。

そして足を取られ、引き倒され

「ぎアーンねんっ!!」

テメェ考えはてンでの的外れなんだよォ！」

少年の腕が足にズブズブと入り込み、足を引き千切れた。

「ぐっ……!!」

御坂妹は少年に電撃を飛ばすが、少年には当たらず跳ね返り御坂妹に直撃する。

その際に、つけていたバッチが飛び、転がって行く。

「追いかけてこでなくなっちゃまったなア」

千切った足を放り投げる。

「このまま、ほっといてもくたばンだろオが、ジッと待ってンのも
たりィからよオ」

御坂妹は何も言わず、飛んで行ったバッチへと這いずって行く

「よオ、そっちは行き止まりだぜ？」

それともまだ、なんか奥の手でもあンのかよ？」

やはり何も言わずバッチへと這いずって行く。

「……………もういいやお前

終わりにしてやンよ」

そう言い少年は近くの車両に近づき、御坂妹の頭上へ飛ばし

「――――！！！！！！！！」

潰した。

・
・
・
・
・
・

・

あー

どうしよっかな

やることないわ

いや、やることはあるけど、今は無理だな……

ガガガガガガガガガガ！！！！

何をやってんだろ……？

見えないから超怖いんだけど

てか早くどっか行けや！

「はぁ……はぁ……」

こっちはヤバいんだよ！

血を流し過ぎてるな……

早いところカエル先生んところ行かねーと

ガアアアアン！！！！

うおっ！？

だから何しとんだ！

早よどっか行け！

・
・
・
・
・

行ったかな？

「『一方通行』だ
アクセラレータ
ヨロシク」

その後、御坂妹が殺されたのを目撃した御坂が一方通行と呼ばれる少年と戦闘をしていた。

が、御坂の攻撃はことごとく無効化され、超電磁砲さえも反射されてしまった。

そして殺されかけた所に大勢のミサカクローンが現れ、戦闘を中止させ、それに渋々従い一方通行は去って行った。

御坂は膝をつく

「……アンタ達……
なんなの……？」

おかしいよ、何でこんな計画に付き合ってるの？
殺されちゃうのよ？

「こんなのワケ分かんない……………」

御坂の言葉にクロール達は何も言わない。

「何だよ!!」

生きてるんでしょ!?

命があるんでしょ!?

アンタ達にも…

あの子にもッ!!」

御坂が叫ぶ。

その瞬間。

ズガン!!

「おーふ……行った行っ妹めっちゃおる!?!」

左天が出てきた

先ほど一方通行が御坂妹へと落とした車両から。

その手には気絶した御坂妹が抱かれている。

「あ、アンタ!?

……ッ!?!　そ、その子は……!」

「あー、うん、アデュー!」

左天はシュッと手を振るともの凄い速さで駆けて行った。

・
・
・
・
・

・
説明しよう！

何故、左天が車両の中から出てきたのか！？

それは左天がファミレスで爆発の熱を感じとった後、かなりの速さで爆発現場付近にたどり着き、そこで今にも殺されそうになっている御坂妹を目撃し自分でも吃驚する程一瞬で周囲広範囲の熱量を吸い取り凍りづけにし、音速ほどのスピードで御坂妹が潰される瞬間に滑り込み、御坂妹を抱きしめ、背中の方に熱の壁を展開し、自分達が入れるスペースを確保し、一方通行が何処かへ行くまで待機していたのだ！

いや、無理あるだろ？とか

一方通行気づかなかったのかWWWとか思ったりするだろう

主人公補正である。

・
・
・
・
・
・

「先生！ カエル先生えええ！！！」

「どうしたんだい？

そんなに大声で」

「急患だよ！ 急患！」

「その子は……」

分かった、こっちに連れて来てくれるかい？」

俺は先生に言われた通りに妹さんを運ぶ。

何でこんな状況に……

あの一瞬みた白髪、あれ第一位だよな？

何やってんだ……？

他にも御坂がいた事とか妹さんがめっちゃいた事とか……

御坂に聞いてみた方がいいかもな……

第十七話 妹さん一（前書き）

今日はいつにも増して短いです

どっちかと言うと閑話的な……

第十七話 一妹さん

あれから妹さんを先生に任せて御坂を探しに行った、が、いなかった。

なので一度病院へと戻ってきた。

「やあ、戻ったのかい」

「先生、妹さんはどうなったんですか？」

「ああ、命に別状はないよ？ けど」

「けど？」

「千切れた片足が無いから足を元通りにするのは難しいね？」

そうか……

あの時、片足を拾うタイミングとか無かったからな……

「本人がいいと言うなら義足はすぐ作ってあげられるんだがねえ」

義足か……

まあ、こればかりは本人次第だよなあ

・
・
・
・

・

取りあえず妹さんは先生に任せて俺は一度家に帰った。

「さて……」

こんなことなら御坂のアドレスとか聞いてたらよかったかもしれんな……」

上条は知ってないのかな？

あ、アイツ、記憶失ってから一回も御坂と会ってないし、ないか……

まあ、取りあえず今日は寝ておこう。

明日、妹さんの容態も見に行かなきゃな……

第十八話 絶対能力進化計画

妹さんの容態を見に病院へとやってきた。

病室へ入る。

するとそこには

「御坂……！」

御坂が座っていた。

妹さんはまだ目を覚ましていないようだ。

「アンタか……」

「よう、昨日探してたんだぜ？
ま、いいけどな」

「うん、ごめん

あと、ありがとう、この子を助けてくれて」

御坂が……ありがとう……だと？

いやいや、別におかしくないか

「俺の熱感知があってよかったぜいで、早速だが聞きたい事がある」

「何故この子が殺されそうになったか……ね」

「そうだ、いやだと言っても教えてもらおうぞ？」

その言葉に御坂はゆっくりと頷いた。

・
・
・
・
・
・
・

「【絶対能力進化（レベル6シフト）】……ねえ」

その為に第一位が御坂のクローン二万人を殺して行くってか？

バカじゃねえの？

クローンと言えども生きてるんだ、そんな簡単に殺していいものじゃない。

「私はこれから【絶対能力進化】計画関連施設を潰しに行く」

「お前一人でか？」

結構な数があると思うんだが？」

「私を誰だと思ってるの？」

電撃使い……

サイバーテロっぽい事をする気か？

「止めたって無駄だろうから止めないけどさあ
何かあれば言えよ？」

例えば、潰して行く過程でキャパシティダウンをくらった時とか助けにいくから」

俺にキャパシティダウンは効かないしな

第四波動は演算いらんし

……………あれ？ これ超能力なのかな？
何か違うんじゃない？と思えてきた……

「てなわけで、ハイよ」
「何？」

「アドレス教えろやあ！」

って事で御坂の連絡先を携帯に登録、と

そして一言二言話して御坂は病室を出て行った。

「施設を潰すかあ……」

第一位を倒した方が早くないか？

確か第一位の能力は……

……………俺じゃ勝てる要素ないわ

待てよ？ 上条さんを連れて行って、第一位が上条さんを無能力者と油断している所につけ込んで、上条さんの右手で能力を打ち消し、俺が第四波動を叩き込むとか……

うーん……

そもそも、第一位の能力を知っていても性格を知らんなあ……

保留。

・ ・ ・ ・ ・

〳数日後〵

うむ……

あれから軽く3日は立ったんだが……

妹さんが目を覚まさないな

かなりダメージを負ってたって事か？

しかし、最初は妹さんが生きてると知って第一位が襲って来たりするかと思ったが……

来ないならいいか

御坂は御坂で俺が連絡しない限り何もないしな……

施設を着々と潰してはいるみたいだが……

………心配だよなあ

ちよつと今夜あたりに援護にでも言ってみるか？

かなり潰してるっぽい施設側もずっと黙って見ている訳もないだろうしな

よし！ 行ってみるか！

しかし、今日はどの施設に向かうか分からない……

御坂に聞いても無駄な気がするし……

よし！ 今からまだ破壊されていない施設を探してみよう！

そういや、佐天さんの友人の花飾りちゃんって確かジャッジメントだったよな？

ジャッジメントなら破壊された施設を知ってたりしないかな？

パンダ子に聞いてもスッゴい怪しまれそうだし……

よし！ 花飾りちゃんに聞いてみるか！

よし、そうと決まれば佐天さんに連絡………

あ、ヤベエ！ 佐天さんの連絡先しらねえ！

………いいさ、ならば柵川中学に行って聞かさ

よし、そうと決まれば行きましようかね。

番外く新年く（前書き）

適当に書いたため見なくても別にいいです

番外く新年く

「明けましておめでとくう!」

「おい、左天……」

いくら何でも11日にそれを言うのは遅すぎるぞ?」

「上条さん……」

いや、でも最近鬱ってて部屋から出るのも不安でいっぱいだったんだ、仕方ないだろ?」

「もう、治ったのか?」

「うーん……微妙?」

まあ、こんだけ小説書いてる癖に新しい小説書こうかなとか考えてしまってる分、元気なんじゃね?」

「また 浮 気 か とミサカは溜め息をつきます」

「おお、妹さん

体は大丈夫なのか?」

「はい、問題ありません、そもそも此処は本編とは全然関係のない場所なので異常などありません

私の千切れた足も綺麗な脚線美を描いています、とミサカはスカートをギリギリまでたくし上げます」

「自分で言うなよ……」

あと見えそうで見えない本当のギリギリとは……

なかなかやるな」

「ふふ、お姉様にはない色気です、とミサカは胸を張ります」

「どうでもいいがこの御坂妹はかなり表情豊かだな……」

「それは、本編で追々書かれるでしょう

作者は無駄に作った伏線を放置する事に長けていますから分かりません」

「さっきから思ってたがメタ発言は止めた方がいいと思うぞ

これ異常メタな事を言ったら上条に【そげぶ】されるぞ」

「そげぶって何だよ……」

「【そげぶ】とはアスキー・メディアワークスより発行されている鎌池和馬先生の作品、【とある魔術の禁書目録】の主人公【上条当麻】の決め台詞である【そのふざけた幻想をぶち殺す】の略です、とミサカは懇切丁寧に説明します」

「上条さんはそこまでの説明は求めてないです!!」

「いや、それはいいんだけどさ

この番外編は一体どういう目的で書かれてるんだ？

俺でも全く分かんのだが」

「私にも分かりません

ただ作者が一応更新しておこうと書いたのではないかと思われま

す」
「まあ、適当感バリバリだしな」

「文章が全部キャラの会話ですしね」

「しかも俺達三人だけしかないもんな……」

「キャラの会話だけだから俺達が今どこにいて話してるのか俺達自身分らないしな」

「……………意味あるか？ コレ」

「さあ……」

しかし、この場でだけフリーダムみたいですし
今まで出来なかった事が出来るかもしれませんね」

「……………第五波動！」

「……………」

「人生そんなに甘くなかった」

「なあ、いい加減グダグダしてきたからそろそろ終わらないか？」

「……………そうだな」

じゃ、最後に一言いつて帰るか……」

「じゃ、まず俺から

新年明けましておめでとうございます。

今年はあまり不幸じゃないように願いたい……」

「何だっけ？」

確か新年の初夢が何かボコられる夢だっけ？」

「言うな！」

ああゝ不幸だあああ！！」

「では、次は私が、ハッキリ言って被験体9982号の私が言える事はありません
なので「やったね！タエちゃん！」とミサカは元ネタを知らずに言います」

「おい、やめろ！」

てか元ネタ知らないなら言うなよ……

じゃ、最後は俺が……

ぶっちゃけ第四波動を使いすぎな気がする。

第四波動って必殺技みたいな奴じゃん？

たがら出来る限り使わないように頑張りたい
以上！」

「自分で言うのもなんだが、俺しかまともな事いってないか？」

「気にするな！」

「それでは皆さん、さようなら、良いお年を、とミサカはお辞儀を
します。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087o/>

とある左天の第四波動

2011年1月11日07時29分発行